



Annual Activity Report 2024

Fieldwork : Toward Social Coexistence

龍谷大学 社会学部

2024 年度 社会共生実習 活動報告書

目次

ご あ い さ つ.....	2
多文化共生のコミュニティ・デザイン～定住外国人にとって住みやすい日本になるには？～	3
コミュニティの情報発信！レク龍プロジェクト.....	20
農福連携で地域をつなぐー「地域で誰もがいきいきと暮らせる共生社会に向けて」	36
お寺の可能性を引き出そう！ー社会におけるお寺の役割を考えるー	46
いくつになっても、出かけられる！～高齢者を元気にする介護ツアー企画～.....	64
障がいがある子どもたちの放課後支援.....	74
自治体を PR してみる！.....	80
発信情報.....	84

ご あ い さ つ

2024 年度 社会共生実習担当者会議

議長 大西 孝之

9 年目となった 2024 年度の社会共生実習は、7 つのプロジェクトに 100 名の受講生が参加しました。瀬田キャンパスを学びの場とする最終年度となった今年度も、地域住民・自治体・企業・団体のみなさまのご理解とご協力をおもひこめて、受講生は各プロジェクトの担当教員とともに現場における課題の探求と解決を図ることができました。衷心より御礼申し上げます。

本報告書では、その 1 年間の取り組みをプロジェクトごとにまとめております。ご高覧いただき、現代社会が抱える課題に対する理解と解決に向けた展望をみなさまと共有できましたら幸甚です。

ご承知のとおり、社会学部は 2025 年度から深草キャンパスに移転し、現在の 3 学科を 1 学科に改組しますが、2024 年度までの入学生を対象として、このプログラムは現在のかたちで継続されます。そして、2025 年度からの新しいカリキュラムのなかで、2027 年度からは社会福祉関係諸資格の取得を目指す学生以外のすべての 3 年生が社会共生実習を受講することになります。

さらなるプログラムの発展のため、引き続きご厚誼を賜りますようお願い申し上げます。

2025 年 3 月

多文化共生のコミュニティ・デザイン

～定住外国人にとって住みやすい日本になるには？～

担当教員：川中大輔

(1) 取り組みの趣旨・目的

グローバル化が進展する中、人々の国際的な移動は活発化している。2022年に国連経済社会局（DESA）が発表した『国際移民ストック』によれば、2000年に約1億7,300万人であった国際移民人口は2億8,100万人に達し、世界人口の3.6%に至っている。日本も例外ではない。法務省出入国在留管理庁『在留外国人統計』によれば2022年末の在留外国人数は307万5,213人であり、2012年以降増加し続けている（2012年末の在留外国人数は203万3,656人）。日本も既に多くの外国人が定住、多文化社会となっているのである。また、日本の植民地支配を背景に移住する／させられることとなった在日コリアンをはじめとするいわゆる「オールドカマー」も、1990年の入管法改正以降に渡日した「ニューカマー」と呼ばれる人々も、移民世代を重ねて日本社会に定着していつている。

しかし、日本が定住外国人や移民背景の住民（以下、定住外国人等）にとって住みやすい社会なのかと言えば、そうではない。「言葉の壁・制度の壁・意識の壁」という3つの壁が立ちはだかつて、生活のさまざまな場面で苦勞を強いられることとなる。日常のコミュニケーションの中で攻撃的な差別に晒されることも見受けられている。日本には体系的／包括的な移民政策や多文化共生に関する基本法もなく、定住外国人等支援は自治体や地域住民の努力任せになっていると言っても過言ではない。こうした中で、定住外国人等の人々が直面している「生きづらさ」から発せられる声に学び、どのような社会変革を成し遂げていくべきかを見いだしていくことが必要とされている。果たして日本社会は「あってはならない違い」をどれほど解消できているのだろうか。「なくてはならない違い」をどれほど保障できているのだろうか。時代と共に変化する「あってはならない違い／なくてはならない違い」について、ホスト社会の人々の認識はアップデートされているのだろうか。「ちがいを越えた協働」をどれほど実現できているのだろうか。多文化共生という言葉は浸透し、社会的にも多くの人に支持されるものとなっているが、残念ながらその「実」が伴っていない。

そこで、本プロジェクトでは、「実」の部分で今どのような多文化共生の取組が求められているのか、その一端を明らかとすることを目的とする。具体的には京都の在日コリアンの方々との交わりを中心に、多文化共生を目指したまちづくりの課題を見いだす。そして、その課題達成のための活動を企画・実践していくこととなる。この過程を通じて、ダイバーシティの向上が、私たち一人ひとりの生を豊かにし、また、新たな社会をつくりだす力の増大につながる道筋を探究していきたいと考えている。

(2) 2024年度の取り組みの紹介

前期はまず日本社会の多文化共生を巡る課題の実際と歴史的／社会的な背景について理解を形成していった。具体的には、渡来人歴史館で大澤重人氏から、ウトロ平和祈念館で斎藤正樹氏からの解説を受けて、朝鮮半島と日本社会との歴史的なつながり、在日コリアンが日本社会で被っている差別／抑圧、基本的人権の保障と平和な暮らしのために展開されている運動について学ぶこととなった。



事前学習と並行して、本プロジェクトの活動地域となる東九条（京都市南区）を訪れ、希望の家児童館で前川修氏から、NPO 法人東九条地域活性化センターで山口恵子氏と小林栄一氏、木之本マリル氏から、NPO 法人京都コリアン生活センター・エルファで李英玉氏と南珣賢氏から各団体の活動／運動の展開について説明いただいた。

このフィールドワークを経て、受講生は自らの問題関心に即して活動先を選択し、チームを編成した。そして、現場での実習活動を通じて得られた情報を整理しながら、企画テーマの候補出しを進めていくこととなった。



夏季休暇期間にはNPO 法人IKUNO・多文化ふらっと（大阪市生野区）を訪問した。同法人理事・事務局長の宋悟氏からは、歴史的な経緯に合わせて、御幸森小学校跡地をリノベーションして多文化共生の拠点として整備された「いくのコーライズパーク（いくのパーク）」の目的・目標や現在の活動についてお話を伺った。まちづくりの視点から多文化共生を進めるとはどのようなことなのか、そこでどのようなことが課題となるのかといった事柄への理解を深めるとともに、今後の活動への示唆を得ることとなった。



後期授業はチームごとに受入先で、活動に従事しながら当事者や支援者、関係者の方々へのインタビューをおこない、企画テーマを絞り込んでいった。

京都コリアン生活センター・エルファでは、在日コリアンの高齢者の方々とレクリエーションを楽しむなどして一緒に過ごす中で関係を構築していき、一人ひとりの生活／人生について話されることに耳を傾けていった。この中で、そうした語りの重要性を認識するとともに、その語りを浮かび上げやすくしたり、分かち合いやすくしたりする課題を見いだすこととなった。そこで、ユンノリにも着想を得ながら人生の語りを促す双六ゲームを考案／制作し、実施した。

東九条地域活性化センターでは、同法人が運営するコミュニティカフェ「ほっこり」で展開されている「ほっこりランチ」や、海外にルーツのある子どもの放課後の居場所を提供する「子どもクラブ」、京都府在住の定住外国人を対象とする「年末生活緊急支援活動」などの諸活動に参加した。この中で、ほっこりに連なる人々の間、特に世代間のつながりが弱いのではないかという課題を見いだすこととなった。そこで、「ほっこり龍会」という多世代交流イベントを実施した。

希望の家児童館では、児童館を利用する子どもたちと遊びながら、多様な背景／特性を持つ子どもと出会っていった。この中で来日して間もない子どもが言語の壁に直面しているのではないかという課題を見いだすこととなった。そこで、非言語でのコミュニケーションを中心としたやりとりを通じて、その人らしさが表現されていくアートワークショップを実施した。

その他、東九条マダンにも参加し、各受入先のブースでのアクティビティ提供や物品販売等に従事しながら、東九条地域の多文化共生のまちづくりの動きと流れとを体感する機会も持った。



(3) 2024年度の取り組みの成果と課題

受入先の方々の積極的なご協力とご厚意により、受講生は定住外国人等はじめ地域で多文化共生を推進するさまざまな人々と直接に交わる機会に恵まれた。その交わりを通じて、受講生は個人差があるものの多文化共生まちづくりの課題を当事者視点から捉えるということを一定程度おこなえたのではないかと思われる。

例えば、受講生のひとはふりかえりにおいて、「特に『物事を多角的見る』という点を実習をとして大きく変わった点である。(略) ハルモニとお話をしていく中で共通の話があった。それはハルモニの幼少期にいじめや差別を受けていたということだ。私がものの見方が変わったきっかけである。ほとんどのハルモニは生まれたときは朝鮮、韓国に住んでいて小学校や幼い時に日本に来たという。日本の学校で過ごして行く中で、あるハルモニは在日朝鮮人というだけで周りの子や先生に差別された。お金がなく、習字の半紙を買うことができず、新聞紙で代用したところ先生に怒られ、バケツを持ったまま廊下に立たされた。私の祖父とほぼ世代が同じであるが、このような事実があったことに驚いた」と記している。自文化中心主義の歴史観の問題点に気づき、認識の変容が促されているように読める。被差別／差別の歴史を過去のこととせず、その中に日本社会の問題点を見だし、現在の課題につなげようとする姿勢は多文化共生社会を創り上げていく市民性の中で重要なもののひとつである。そうした姿勢の形成の機会のひとつとなったと考えられよう。

ただし、学生の問題意識の明確化や企画テーマ設定で時間を要した点は継続的な課題である。そのため、今年度も後期後半では活動成果を形にすることに傾注することとなった。今年度は関連文献を配布したり、読み込んだりする時間を一部に設けたものの、理論的な観点から考察を深めていく熟慮／対話の時間が十分にとることができなかった。実習活動中のできごとに関する批判的省察を深める方途を見いだしていきたい。

また、一部受講生については、受入先との信頼関係の構築に困難を来したことも見受けられた。自らの価値基準と判断枠組みに捕らわれすぎていたり、活動時間数の確保に意識が向きすぎたりして、「現場」への内在的理解を図ろうとする思考や、本実習や本プロジ

エクトの趣旨に立ち返って行為していく姿勢から遠ざかったためである。そのため、実習期間中に受入先に惑いや憤りをもたらすことになってしまった。受入先と担当教員とで調整しながら立て直しを図ったが、問題の解決に至らなかったところもある。これは担当教員の指導力不足であり、この場を借りてお詫び申しあげたい。



本プロジェクトは今年度が最終年度となる。まず、本プロジェクトの目的にご理解いただき、5年間にわたって協働的实践を共に担ってくださったコミュニティ・パートナーの皆様方に深謝申しあげる。他の実習科目とは趣旨も形態も異なる中、手探りでの取組となったが、ご尽力により意味あるものへと展開いただけた。担当教員も受講生と共に多くの気づきと学びを得て、自己変容へと誘われることとなった。

また、この実践を後方より支えていただいた社会共生実習支援室や社会学部教務課の方々に感謝する。コミュニティ・パートナーや学生に、その働きは見えにくいものだが、円滑な推進には不可欠なものであることは言うまでもない。

最後に、本プロジェクトの5年間全ての受講生に謝意を表したい。こうした実習において、担当教員は良き伴走役となることが求められるが、必ずしも常にそうあり続けられたわけではないだろう。にもかかわらず、受講生の皆さんは「現場主義」の教育実践に真摯に臨み、現場での対話と協働を具体化してくれた。

一人ひとりのお名前は挙げられないが、その他にも幾多の方々のご協力なくしては成り立たないものであった。この場をお借りしてお礼申しあげる。

(4) 2024 年度活動報告会の発表資料、発表ポスター

ポスター①：ほっこりチーム

多文化共生のまちづくり コミュニティカフェほっこり

～ほっこり活動メンバー～
坂本、ピョン、秋道、世古、佐郷、シエン、中矢

👤 = 学生の活動内容



(ほっこりカフェの店舗)

ほっこりってどんな場所...?

京都市東九条地区の南岩本市営住宅に付帯しており、2018年10月9日に開店。この東九条地区は、**在日コリアン**と一緒にコミュニティを築いてきた歴史がある。現在の東九条地区は、**少子高齢化**の波を受けて後の賑わいがなくなり、**住宅市街地総合整備事業**による**劇的な空き地**が生み出されている。この現状をなんとかしたい！との思いでNPO法人を立ち上げ、市営住宅空き店舗を借りて**カフェ事業**を始めた。

コミュニティカフェほっこりでは、誰でも気軽に立ち寄れる場所、年齢や民族や通称や心身状態など「**ちがいが**」を普通に出せる場所、子どもからお年寄りまで集える場所、「**こんな手助けがあると助かるな〜**」という声が聞かれる場所をすることを目的としている。





(子どもたちとの交流)

子どもクラブ

フィリピンに国籍を持つ定住外国人の家庭の「**子どもの居場所を作りたい**」という声から発足

- ・日本語がまだ不十分な子どもがスタッフから日本語指導を受ける
- ・学校の宿題 ・トランプやUNOなどで遊ぶ

など様々な目的で利用されており、子どもたちがありのまま自由に過ごすことができる場所である。

現在では、定住外国人の子どもたちだけでなく、近くの小学校に通う子どもたちも集まる「**子どもたちの居場所**」となっている。

ひとり親家庭や夜遅くまで仕事がある親にとって、安心して子どもを預けられる場所となっている。

第3土曜日には**子ども食堂**を実施！季節ごとに**イベント**も！

👤 子どもたちと遊んだり、話したりと自由に交流



(季節のイベント：遠足、ハロウィン)

将棋クラブ

2019年に開設された将棋クラブは、毎週水曜日の13時～16時、高齢者4人で活動！メンバーで将棋を楽しむ場でもあり、**高齢者同士の交流の場**でもある。

将棋は戦略的ボードゲームであるため、**高齢者の認知症予防**にも繋がっている。

誰でも楽しめる雰囲気であり、会費も毎回100円なので、**初心者でも気軽に行きやすい！**

👤 一緒に将棋をしながら高齢者と交流

夏祭り

「**子どもたちに夏の思い出を作ってもらいたい!**」という思いから去年より開催**2回目の開催**となった今年は、**子ども58人+大人28人=86人も**の人が参加！

- ・かき氷、フランクフルト、ポップコーンなどの屋台
- ・ほっこりの中で間違い探し(全部わかった人にはおかし詰め合わせの景品あり)
- ・みんなで花火

👤 屋台スタッフ、間違い探しのヒント出しをお手伝い

コミュニティカフェ

高齢者や在日外国人、小さな子どもを持つ親、学生など**誰でも気軽に立ち寄れる場所**となっている。

コーヒーやビールを飲みながら、フィリピンやインドなどのランチメニューを楽しんだり**初めて会った人同士でも、その場にいればみんなでおらん。**

様々な人がこのカフェをきっかけにつながることで集まる場所となっている。

👤 カフェに来たお客さんのメニューを覗いたり、ちょっとした会話をしながら交流

年末支援事業

2021年にコロナ禍で生活が困難していた**定住外国人や技能実習生、地域の方々**(主に高齢者や小さな子供がいる家庭)の**生活を手助け**することを目的に始まった。生活に困っている人に**食料**や**日用品**などの支援物資を**無料**で配布している。

食料品：米、缶詰、袋麺、お菓子など
日用品：ティッシュ、洗濯用洗剤、カイロ、オムツなど
合計10点程の物資が入っており、**豊富な内容**となっている。

この活動は、高齢者や定住外国人にとって**生活を支える大きな支援**となっている。

👤 支援物資の袋詰め、近隣の家に支援物資の配布



(フィリピンランチや子ども食堂でのご飯)

東九条マダン

11月3日(日)に京都の元脚色小学校で開催されたお祭り。外国にルーツを持つ人や障害者、子ども、高齢者など**様々な背景を持つ人達**が集まるのが特徴！ほっこりでは、

- ・フィリピン風香巻き「**ルンピア**」 ・天然酵母の手作りパン
- ・フィリピンの缶詰、日用品などを販売。

公産では、保育院から大人まで年齢問わず東九条に住む人々による**和太鼓と韓国伝統芸能のサムルノリ**を組み合わせた**演奏**が、一番の盛り上がりを見た。

東九条マダンは、「**一つのカテゴリー**」として他者を見るのではなく、「**その人**」として向き合っており**魅力**が一番の魅力！

👤 **ルンピア作りと販売のお手伝い**



(支援物資と袋詰めの様子)



(地域住民と子どもたちによるサムルノリ)

東九条マダン

11月3日(日)に京都の元脚色小学校で開催されたお祭り。外国にルーツを持つ人や障害者、子ども、高齢者など**様々な背景を持つ人達**が集まるのが特徴！ほっこりでは、

- ・フィリピン風香巻き「**ルンピア**」 ・天然酵母の手作りパン
- ・フィリピンの缶詰、日用品などを販売。

公産では、保育院から大人まで年齢問わず東九条に住む人々による**和太鼓と韓国伝統芸能のサムルノリ**を組み合わせた**演奏**が、一番の盛り上がりを見た。

東九条マダンは、「**一つのカテゴリー**」として他者を見るのではなく、「**その人**」として向き合っており**魅力**が一番の魅力！

👤 **ルンピア作りと販売のお手伝い**



(ルンピアやフィリピンの食料品などの販売)

学生の企画イベント ほっこり龍会～みんなで楽しく遊ぼう～

〈イベント開催の経緯〉

ほっこりはたくさんの子もたちやお年寄り、様々なルーツをもつ人達が集まって、**みんな自由に過ごすことのできる、「みんなの居場所」**になっている。

ひとつの空間に**多種多様な人々が集まっているが、子どもたちは子ども同士、お年寄りはお年寄り同士**で、**というように年齢が近い人同士で固まって過ごしている。**

せっかく**色々な人が集まる場所**になっているので、「**〇〇さん、こんにちは!**」など**挨拶だけでも交わせるような関係**になって欲しい!

普段の活動員の中に、**コミュニティカフェを利用して高齢者の方が子どもたちの方を見ていたり、子どもたちの様子を学生に聞いてくれることが多々あった...**

〈目的〉

「ほっこり」という**様々なルーツを持った人たちが自分らしくいられる場所**で、**普段あまり関わることのない高齢者と子どもたちの「交流の場」**を設ける。



(イベントでの食事の準備)

〈イベント内容〉

- ① アイスブレイク (音楽に合わせてみんなで名前を呼び合う)
- ② 発表 (親父バンド、子どもたちのダンス、龍谷大学学生の出し物)
- ③ 遊び (ボール運び、ボール転がし)
- ④ 休憩 (みんなでフィリピンの伝統香き馬お菓子「トロン」を食べる)
- ⑤ クリスマスリースづくり (みんなで好きな飾りをつける)
※時間の関係上割愛 (後程、普段の子どもクラブにて子どもたちと一緒に飾り付け)
- ⑥ 感想を紙に書いてもらう
- ⑦ お菓子渡し



〈活動結果〉

今回のほっこり龍会には、高齢者1名、地域の1名、親子参加2家族、子どもたち15名**合計21名**もの参加!

ほっこりスタッフや子どもたちの素晴らしいパフォーマンスと学生音楽の交流ゲームを通じて、**最初は少し緊張し距離があった参加者たちも、次第に打ち解けていった。**
会場は**笑顔と笑い声**に包まれ、**世代を超えた交流**が生まれた。
このイベントを通じて、**全員が心温まるひととき**を過ごし、**かけがえのない思い出**を作ることができた。



(みんなで出し物やゲームを楽しむ様子)

〈活動を終えて〉

(イベントポスター)

今回の活動を通して、「**世代や文化を超えた交流の持つ力**」を改めて実感した。普段なかなか接することのない人々が**一緒に笑顔を共有し、協力し合う中で、新たなつながりや信頼**が生まれる瞬間を感じることができた。

- しかし、以下の点が今後の課題として残った。
- ・高齢者や地域の方の参加人数が少なく、子ども中心のイベントになった
 - ・高齢者や地域の方との交流が限られていた
 - ・世代の異なる参加者同士の関わりが薄かった

「**多様な参加者が平等に楽しめる場をどう設計するか**」という問いに向き合い、**誰もが自分らしく過ごせる全員が主体的に交流できる場づくり**を目指す。



(フィリピンの伝統的な食べ物：トロン)



(サンタさんからお菓子のプレゼント)

〈一年の活動を通して〉

① **アイデンティティを大切にできる場の必要性**
生い立ちや国籍などのルーツに関係なく**ありのままの自分で居られる場所**だからこそ、お互いに**「違い」**を認め合い、受け入れることができる環境

社会は「**ハーフだから**」、「**外国人だから**」と見た目だけで判断し、**目には見えない壁**を作ってしまうが、**子どもたちの間には見た目による壁があるようには見えない**。それは、東九条地域の住民たちがお互いを「**一人の人間**」として受け入れ、接しているからだ。このような環境が、ほっこりに来ている子どもたちにとって**当たり前**の日常であることが「**違い**」を認め合う**地域**を作っている。

② **つながり・支え合いの地域のコミュニティカフェ**
東九条は**地域住民で支え合い、繋がることを大切にしている**町だ。
ほっこりでは**こども食堂・こどもクラブ・年末支援事業**など様々な事業を行っている。
これらの活動は、行政やNPO、社会福祉協議会など多くの**人々の協力から成り立っている**。
多くの協力の中でも、ほっこりスタッフの方々の**「誰一人取り残さない」**という強い思いが**町全体を支えている**。

③ **どんな人でも気軽に立ち寄れるあたたかい場所**
ほっこりはこの東九条の地域に住む人々にとって**重要なコミュニティーの場**となっている。
誰でも、いつでも気軽に立ち寄ることができ、**どんな人でも受け入れてくれるほっこりの存在**はとても暖かく、**東九条に住む人々の心の支え**となっている。



(ほっこりの前で小林さんをパシャリ!)

一年間ありがとうございました!

社会共生実習 多文化共生のコミュニティ ～エルファでの取り組みを通して～

1、共生の場エルファ

私たちが実習生として訪れたエルファでは在日コリアンをはじめとする多様な背景を持った方がディサービスを利用していた。元々人の出入りが多い東九条に位置するこの場所では、人との関わりも多いため実習生も快く受け入れていた。

私たちは利用者さんと共にゲームや体操、カラオケなどの日常的な取り組みに加えエルファ祭りなどの行事にも参加しコミュニケーションを取った。



2、主な活動記録

- 6月 顔合わせ、実習開始
- 10月 職員さんへインタビュー、人生ゲームの企画始動
- 11月 エルファ大運動会
- 12月 エルファ祭り



3、インタビューを通して見つけた課題

インタビュー内容

Qエルファとして大切にしていること
Aその人その人を形成してきた民族的なアイデンティティを受け入れることが在日だからこその苦悩や良かったことを一人ひとり理解して接することを心がけている

Qおやつ時など職員さんが利用者さんと同じテーブルで過ごさないのは何故

A事務業務があり、した方が良いができていない現状やりたいことやらなければならないことのバランスが難しい

Q大学生を受け入れている理由

A在日コリアンを知ってもらいたい、エルファはそれを知れる場所だから

利用者さんの声

- ・学生さんともっと色んなこと話したい
- ・体を動かすのは困難けどお喋りは好き

課題発見

インタビューに応じてくださった職員の任さんは、エルファでは利用者さん第一の考えを持ち、民族的特色に甘えず「エルファならではの」を追求し、何故エルファに通ってくれているのかを考え続けることに尽力しており、実習生には在日コリアンのことをたくさん知って欲しいと考えていることを語った

もともと東九条は人の出入りが多いため人との関わりに慣れている方も多らしく、利用者さんへのインタビューでも「お喋りするのが好き」と答えられる方が多い印象を受けた

しかしながら、コロナ禍で人との交流が薄れてしまい、職員さんにも普段の業務があるために、利用者さんの話したいことが十分に話せないまま関わらざるを得ない現状も時折あるのではないかと考えた



4、目指したいもの

エルファを訪れた実習生が在日コリアンを知ることが出来るもの



「その人らしさ」が詰まる利用者さんのバックボーンに触れたい

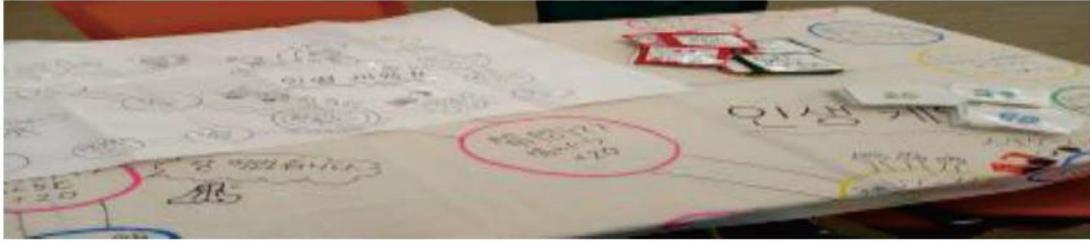


利用者さんの記憶を揺さぶるきっかけになるようなもの



「質問」を普段エルファ内で行っているレクリエーションに昇華する!

5、計画中の企画



『質問マス』がたくさんの人生ゲーム

韓国の伝統的な遊びで日本という双六のようなゲームである『コンノリ』に人生ゲーム的な要素を付けたレクリエーションを考えた質問マスを多くおくことで利用者さん一人一人の理解を深め、エルファへたどり着くまでの人生を追体験できるようなものになっている。

テスト質問をしてみて

質問を投げかけられて利用者さんが答えづらいものや個人の色が出ないものが無いかどうか、普段の会話の中で質問できるものをテストとして投げかけてみると以上のようなお話をたくさん聞くことができた。

Q: よくテレビで何をみますか？

A: 『遠山の金さん』や『水戸黄門』などの時代劇、悪事が白日の下に晒されて成敗されるようなスカッとする物語が若い頃から大好きです。

Q: 今、行きたい場所は？

A: 冬休みに家族と温泉旅行をする予定で今はそれが一番楽しみ。

Q: 趣味は何ですか？

A: 美容は心の健康に良い、50代の頃眉毛のタトゥーを入りに韓国へ行ったことがある。

日常生活から利用者さんの人生や過去に触れることの難しさを痛感するとともにより深く利用者さんを知ることができる楽しさや写真を用いて当時を振り返りながら詳しく語る利用者さんの親しさを感じることができた。

投げかけられた課題

エルファでのレクリエーションには色々な利用者さんが一つの輪になって参加するのでさまざまなお話を聴くのに適切な場であると同時に、一部の利用者さんにとっては複雑すぎてしまうという課題が新たに生じた。例えば、「修学旅行はどこへ行きましたか」という質問は、文化背景が異なるために「修学旅行」とは何かを知らない、または日本語から意味を理解できないなどの理由から質問文を改める必要性が出た。職員の方に韓国語で補足していただいたり、質問文を簡単なものに言い換えたりなどの対応をすることに決まったが更なる多文化の未来を見据えるエルファではもう少し利用者さんに寄り添った内容である必要性があることを確認した。

6、実習を通しての学びと気づき

一世代や文化の違う色々な背景を持つ利用者さんと関わったことで普段の生活でも多角的に見て過ごすように意識することが増えた。

・一文化の違いなどを肌で感じつつも利用者さんの人となりを知りながら実習を重ねる度に深い話もできるようになった。利用者さんが我々を実習生というくくりを越えた個人として認識してくださったように、これからエルファを訪れる実習生たちが私たちの作った人生ゲームで利用者さんのことを広く深く知ってほしいと願っている。

ポスター③：希望の家チーム



多文化共生のコミュニティ・デザイン

希望の家



希望の家とは

「位置」：京都市南区東九条東岩本町に位置する。
「事業内容」：学童クラブ・幼児クラブ
児童館は、児童福祉法第40条に定められた「児童に健全な遊びを与えて、その健康を増進し、又は情操をゆたかにすることを目的とする」児童福祉施設で、地域のさまざまな年齢の子どもたちが自由に来館して遊ぶことができる場である。子どもたちは遊んだり、図書等で本を読んだり、児童厚生員とおしゃべりしたりと、思い思いに過ごすことができる。児童館には児童厚生員が配置されており、子どもたちに遊びを通してその成長を支え、遊びやクラブ・行事などを通して年上・年下の友達とのふれあいを促し、また、助け合う心や工夫する力を育てる。また、子育て中のお母さん、お父さんに寄り添い、子育て家庭への支援や児童に関する地域の活動センターとしての行事や取り組みなども行っている。誰もが満足なく、気軽に立ち寄れる子どものための施設、それが児童館である。

・希望の家児童館の理念・取り組み③多文化共生：多様な国籍や出身に関わらず、お互いを自然と認め合える多文化共生意識の育成④統合育成：障がいの有無を問わず同じ時間を共に過ごし、お互いの存在を身近に感じられる生活⑤異世代交流：併設の地域福祉センター希望の家と協力して行う、行事等を通じての異世代間の交流を大切にしながら、あそびや様々な行事を通じ、年上・年下の友だちとふれあい、助け合う心や工夫する力を育てる。

課題と背景

希望の家児童館では、多文化共生の理念が掲げられ、多種多様な子どもたちが多様な国籍や出身に関わらず、お互いを自然と認め合える多文化共生意識の環境が存在する。その中で、まだ日本語に精通していない子どもたちが多く存在し、苦勞している様子を実習活動を通してよく目にする場面が多々あった。その中で、特に印象深く残っている子が2人いた。1人目が、ベトナム人の女の子である。彼女と初めて会った時、言葉が通じないことからの不安、察し着かず感情を抑えられないことをよく目にした。言葉が理解できず、伝えることができないことは、とてもストレスが掛かると感じた。しかし、日が経つにつれ少しずつ理解できるようになったのか、落ち着きが見られ、友達と遊ぶような場面が見られた。だが、言語の壁があることで上手く人と関わることができないことは、とてももどかしいことだろう。2人目が、中国人の男の子である。彼も彼女同様言葉が通じないことからの不安、察し着きが見られず、よく声を上げていた場面も遭遇した。また、孤立しており、言語が通じれば、孤立することはなかったのかなどと考えることもあった。これらの主な経験から、希望の家にはさまざまな背景を持つ子どもがいて、日本語が不自由な子どもがいてることを実習を通して学んだ。そこで言語の壁をなくし、皆んなが一緒に楽しくし、仲良くなれる企画を何かできないかを考えた。

アートワークショップ

2025/1/6 13:00~14:30開催
背景：希望の家にはさまざまな背景を持つ子どもがいて、日本語が不自由な子どもがいてることを実習を通して学んだ。そこで言語の壁をなくした企画を何かできないかを考えた。
目的：アートは、単に美しいものを作るだけでなく、個人的な表現や感情の表現ができる。今回のアートワークショップを行い、子どもが自分をより認知し、国籍、言語、文化の壁を越えることのできる機会を作ること。
◎アクリル絵の具、木や石などを使用する表現活動となっており、のびのびと自分を表現できる取り組みとなっている

結果：子どもが自分をより認知し、国籍、言語、文化の壁を越えたアートワークショップは、成功に終わったと言えるのではない。普段、言語の壁がある子どもであっても、アートワークショップを通して、新たな一面を見ることができ、新しい発見が多々あった。例えば、今回のアートワークショップでは4色ほどしか絵の具がなかったのに対し、絵の具同士を混ぜ合わせて新しく色を作ったり、木や石を絵を描く道具として持っていったが実際は木や石を絵の具と共に紙の上に飾って作品にした事が挙げられる。しかし、関心はそれぞれ異なるため参加者のモチベーションの差があったことは確かで、参加者全員が同じ気持ちでアクティブに参加することが難しかったようである。また、机裏に関係を作っていくことが課題として挙げられ、一回限りのアートワークショップで終わって、交流がなくなってしまい、どうすれば良いか考えなければならない。

実習を通じて学んだこと

まず現場での実習活動を通して、私が驚いたことがある。それは、日本であることで「日本人」ということを子供たちに驚かされたことだ。子どもの頃から多文化・多国籍が当たり前である環境で多文化共生することは、我々よりも、多文化に関する理解が進んでいるように思われた。そうした多文化について大人になってから理解することは、中々難しいと感じるが、子どもの頃から多文化共生という環境のところに身を置くことは多文化について理解する上で、とても大切なことだと学んだ。

未来への願望

私が望むことは、言語の壁があったとしても、自分自身を表現する方法は多く存在する。その中で、上手く自分を表現して、1人1人の個性だと認め合い、多文化共生を目指したいと強く考える。そのために、私は、共生できるための必要なコミュニケーションスキルは何か?という問いを挙げ、効果的なコミュニケーションを取るために必要な言語や非言語のスキル、相手を理解するための聴く力について考えなければならぬ。私たちは、この実習活動を通して、グローバルな視点が狭いことに気付いたが、同時にもっと社会や地域に貢献したいという意識が向上した。国際化が進む中、ますます言語の壁というのは、考えなければならない問題だ。また、異文化について、早く理解することは難しいと考えるが、1人1人が少しずつ理解をしていくことが多文化共生に繋がると考える。

職員の声：
Aさん：アートワークショップをするにあたり、やる前は、不安で大丈夫かな?と思うほどであったが、実習してみて良かったし、また楽しみにしている子どもたちが多く居て、子どもたちの新しい一面が見れた。例えば、色の使い方が上手であったり、言葉落ち着きがない子どもでも自分を表現することに没頭していた。
Bさん：チームでの連携が取れていないと感じ、とても不安に感じていた。なんとか無事終わって子どもたちもやって楽しそうだったので良かった。
子どもたちの声：楽しかった。またやりたい。

(5) 受講生の感想

《ほっこりチーム》

社会学科：秋道七美

■実習を通じての気づきと学び

私はこの多文化共生のコミュニティ・デザインで1つ目に、意識していなくても偏見をもってしまっていると気が付いた。実習先などで、なにか障がいを持っている方や、外国にルーツを持っている方と話しているときに、「自分と違うからと言って避けたりしてはいけない」、「普通に“話さなければならぬ」と、「差別してはいけない」という考えが大きくなり過ぎて、かえってとても失礼な、変に特別視してしまうような感じで話してしまっていた。これに気付いた時、「何か違うな」と感じ、違和感とこのままでは今まで見て、感じてきたことが無駄になってしまうと思った。自分の無意識化で、人を色眼鏡で見えている自分がいて、とても悲しくなった。しかし、このおかげで、授業を受けるまでは「自分は差別していない」と当たり前のように思っていたが、意識していなくても差別をしてしまっていると気づくことができたため、改めて、真正面から人と話すことの大切さを知ることができた。

2つ目に、会話の中の小さなヒントを聞き逃さないように、話をするようになった。私がお世話になっていた「コミュニティカフェ・ほっこり」では子どもからお年寄りまで様々な人との出会いがあった。会話を重ねていく中で普段ではあまり話してくれないようなことをポロっと教えてもらい、何気ない一言からその人の性格や困っていることが読み取れる。とくに子どもはあまり大事なことや学校での出来事や困りごとを簡単には教えてくれないため、何回も話しかけて楽しく会話をしながら少しずつ質問し、注意深く話を聞くことが大切だと感じた。特に、ほっこの小林さんの「子どものすることや言うことには何か意味がある」という言葉が印象に残っていて、一見ただ暴言を吐いているだけに見えても、裏に複雑な家庭事情や問題、悩み事を抱えているのかもしれない。その子なりのSOSのサインなのかもしれない。その小さな信号を読み取ってあげるのが私たち大人のすべきことなのだと、それを聞いて気が引き締まった。

3つ目に、何かひとつのことをみんなで楽しむことの大切さを改めて実感した。これは東九条マダンと自分たちが企画した「ほっこり龍会」で感じたことで、それぞれ会場にはさまざまな年齢・性別の生まれやルーツを持った人が集まっていて、「みんなで」同じ祭りを楽しんでいた。祭り・イベントでは誰もが平等で、誰でも同じように遊べて、楽しめる。会場の一体感に圧倒され、単純なことかもしれないが、「一緒に楽しむ」がどれほど大切かを思い知り、とても会場の空気に感動した。

■実習から考える現代日本社会の課題

私が解決しなければならないと思うことは人々の「偏見の目」である。理由は、上記にも書いた通り、私自身も無意識の偏見を持ってしまっていたこと、ほっこりでの子どもた

ちのやり取りを見ていたことである。最近の実習で、ほっこりに来ていた子どもたちが、同じくほっこりに来ていたネパールの女の子にあまりよくない発言をしていたのを聞いてしまった。以前、台湾にルーツを持っている子と普通に話しているのを見かけていたため、ほっこりの子は普通の大人よりも多文化共生できているという印象を受けていて、とても驚いた。やはり、少し見た目が違うと偏見を持ってしまうのかなと感じる。また、社会には私のように無意識の偏見を持っている人が多いのではないかと感じる。

最近になって「差別はやめよう」という考えが世界で広がり、少しでも意識する人が増えたと思う。しかし、どんなに意識しても無意識のうちに色眼鏡で人を見てしまっているケースが多いのではないだろうか。ほっこりで実習していて気づいたことだが、子どもたちからいろんなルーツ・考え方を持っている人と関わることはとても重要である。今の「日本人」は自分たち同胞ばかりがいるところに慣れてしまい、多文化共生に触れる機会がなかったために偏見をしてしまうのだと思う。日常的にいろいろな人とコミュニケーションをとることでそれが当たり前になり、自分の周りに日本とは違うルーツを持っている人がいても何も気にならなくなる。今の「日本人」に必要なのは子どもたちから、多文化共生と触れ、いろいろな人・考え方があって当たり前だと知ることではないかと思う。そのために、ほっこりのようなコミュニティカフェを増やしたり、学校で多文化共生をテーマにした授業を取り入れたりすること、外国にルーツを持つ子と積極的に関わりを持てるような環境を作ることが必要ではないかと思う。



— ほっこりチーム —

■実習を通じての気づきと学び

実習を通して自分に起こった変化として次の3つを紹介する。

1つ目は、任さんへのインタビューを通して得た新しい価値観である。インタビューの中で任さんは、受け入れることと染まることは同義でないと言っていた。私はそれを、一人ひとりへの理解を深めることも重要だけれど他人への尊重が大切のように自分自身のアイデンティティも守られるべきなので相手に染まらない意思を持つことも重要であるというように解釈したが、このことがエルファで利用者さんと関わる上での勇気になったと思われる。共感するのに同じ経験をしたか否かは全く関係がないと背中を押されたことで、利用者さんとより深いお話がより気楽にできたのではないかと考えている。

2つ目は、学びの場から楽しむ場として意識が切り替わったことである。東九条マダンへ参加したとき、南さんから「まず楽しんでほしい」と伝えられた。楽しむことで視野が広がり、結果として多くを学ぶことができたのを実感し、エルファにおける実習でも楽しむという意識を強く持って挑むことにした。すると足が軽くなったように、以前よりももっと積極的に行事やプログラムに参加できるようになり、私自身が楽しんでいることを全面に出したことで利用者さんの楽しそうな様子もたくさん見ることができるようになった。特に、立つことすら億劫に感じていらっしまった利用者さんが一緒に踊ってくださったときは本当に感動した。「楽しい」は文化などを超えて人に伝染していくことと共感も過去のことにのみならず現在のことに使えるコミュニケーションであることを肌で再認識した。

3つ目は、自分から「やりたい」を発信できるようになったことである。出し物である人生ゲームの製作にあたって、利用者さんだけではなく職員さんともお話をする機会が増えたことで起こった変化であると思われるが、このことでエルファでの経験の幅がより広がったと実感している。主な活動内容としてはゴミ箱作りやラベル貼り、利用者さんが帰られた後の消毒作業などの雑務に加え、沐浴後の利用者さんの髪を乾かす業務が該当するだろう。どれも慣れない経験で思いの外難しいと感じることも多かったが、利用者さんと雑談しながらやるなど職員さんからのアドバイスを実行していると、そのおかげで気を許してくださった利用者さんもあり、エルファでの日常の至るところに介護があるのだと改めて確認した。

■実習から考える現代日本社会の課題

私が思う現代社会において問題と思うことは、多様性に関する理解の食い違いである。今回の実習においてたくさんの人と関わり、多様性を認め、誰もが生きやすい生活をするための支援を、一人ひとりが大きな思いで活動し、生活をしているとわかった。そし

て私が実習先で訪れたエルファでも、在日朝鮮人にルーツを持つ人が、日本人の利用者の人がお互い認め合い生活している場面も伺うこともできた。

しかし、お互いを完全に理解することは難しい。私自身、半年間エルファでお世話になり、施設のこと、利用者のことも知ることができたと思う。だが、理解したとは思っていない。東九条のフィールドワークで初めてエルファを訪れた際に職員さんのお話の中で「知っているで、終わらない、知ろうとする行動が大事である」とおっしゃったように行動が重要だと改めてわかった。

なぜ、私が多様性に関しての食い違い問題にしたかという、今回の実習を通して気づいたことがある。最初初めて訪れた際、在日朝鮮のルーツを持つ人は日本のことを少しばかりネガティブなイメージをもっていると思っていた。過去に日本の政府に対してひどいことをされていた経験を聞いたことから実習生を表面上だけ迎え入れていると思ったが、実際話しをする中でどの利用者さんも私たちを心よく迎えてくれた。そして最後の挨拶にした際は、涙を浮かべる様子もありとても心が温まった。

私は最初の事前情報だけで決めつけをし、会話することを最初はためらっていた自分がいた。関わることにより関係を深めることのもつながる。ウトロ地区で起こったウトロ放火事件もメディアの報道により誤解を生んだという例もある。今、日本は多様性が注目され、認め合い、共生が根付いているが、異なったままで理解をすることで、差別、偏見につながり、共生から離れてしまう。問題を解決するには、コミュニケーション、教育、相互理解を深めることが重要であると考え。そして、情報が多くある中でなにが正しいのか、間違いなのかを自分の目で確認することが重要だと考える。



— エルファチーム —

■実習を通じての気づきと学び

過去一年、私は「多文化共生のコミュニティ・デザイン」の実習を通じて、異文化交流と理解の重要性を深く実感した。特に「希望の家」という児童館での仕事では、異なる文化的背景、家庭環境、身体的条件を持つ子どもたちと接することで、私自身が多くの面で大きな変化を遂げた。価値観や思考方法、他者との接し方に至るまで、深い変化を経験した。

1. 価値観の変化

実習の初め、私は多文化共生についての理解が抽象的で、主に理論的な部分にとどまっていた。しかし、さまざまな文化的背景を持つ子どもたちと接していく中で、文化差異の複雑さに気づき始めた。特に、児童館に通うベトナム籍の女の子との関わりが、初めて文化の衝突に直面した経験となった。言葉が通じず、家庭背景が異なり、教育観念も違う彼女とのやりとりは、私にとって大きな挑戦だった。

この経験を通じて、「多文化共生」とは単に他者を受け入れるだけではなく、彼らが直面している独特の困難や課題を理解することだと気づいた。子どもたちと接する中で、私はより多くの寛容を学び、以前は「不適切」や「理解しにくい」と感じていた行動に対しても、今では相手の立場に立って考え、彼らの文化背景や個性を尊重するようになった。違いを尊重し、包容する心を育むことができ、これによって私はより寛大になり、多様性の中で共通点を見つける方法を学んだ。

2. 交流方法の変化

最初、これらの子どもたちと交流する際、私は緊張して不安だった。言葉が通じないため、自分の考えを正確に伝えることができず、子どもたちの特別なニーズにどう応じるべきか迷っていた。しかし、次第にこの環境に慣れ、自信を持つようになり、非言語的な方法で子どもたちと交流することを学んだ。笑顔やジェスチャーなどを使ってコミュニケーションを取ることで、子どもたちと繋がるできるようになった。さらに、子どもたちの肢体言語や目線を観察し、彼らがどのような支援を必要としているかを敏感に感じ取れるようになった。この経験から、コミュニケーションは言語だけに頼るものではなく、行動や感情を通じて他者と繋がる方法を学ぶことができた。

3. 突発的な出来事への対応の変化

実習の中で、足に障がいを持つ子どもがブランコに乗りたと言ったことがあった。彼を楽しませ、快適に過ごさせるために、私は彼をブランコに乗せることに決めた。しかし、彼の身体的な理由で、活動中に尿失禁してしまった。突発的なこの状況に直面したとき、私の第一反応は驚きと戸惑いだった。ボランティアとして、私はこれまでこのような

状況に対処したことがなく、どうすべきか分からなかった。その子どもの顔に現れた困惑と無力感を見て、私は自分の役割がただ遊び相手をするだけでなく、子どもが最も必要としている時に慰めとサポートを提供することだと痛感した。

この経験から、ボランティアやサポート役として、私たちは単に子どもたちを楽しませるだけでなく、突発的な出来事に対応する能力が求められ、より多くの共感と責任感を示さなければならないことを学んだ。障がいを持つ子どもをサポートすることは、日常の活動や遊びだけでなく、彼らが困難や恥ずかしい状況に直面したときに、感情的なサポートと理解を提供することの重要性を再認識させてくれた。多文化共生は文化交流だけでなく、特別なニーズに対する関心とサポートを含むことだと改めて実感した。

■実習から考える現代日本社会の課題

現代の日本社会において、解決すべき重要な問題は、文化差異が引き起こす教育やコミュニケーションの障がいであり、特に異文化背景を持つ子どもたちに対して顕著である。日本は比較的単一文化の社会であり、近年では多文化共生の理念が推進されているものの、実際には文化差異が子どもたち、特に移民家庭の子どもたちにおいて、言語や教育観念における障がいを引き起こすことが多い。このような障がいは、学習や社会性に影響を与えるだけでなく、感情面や心理面での孤立を招く可能性がある。

児童館の実習を通じて、異文化背景を持つ子どもたちと接する中で、文化差異は言語だけでなく、家庭環境、教育方法、日常生活の習慣などにも表れることを深く実感した。例えば、「希望の家」の児童館では、ベトナム出身の女の子に出会ったが、日本の子どもたちと交流する中で、言葉の壁や教育観念の違いから、彼女は日本社会に溶け込むのに困難を感じていた。これにより、十分な理解と受容がなければ、これらの子どもたちは集団生活に適応することが難しく、社会的に孤立する可能性があることを痛感した。

この問題が未解決である理由は、主に日本社会において、多文化共生の理解がまだ表面的なものであり、具体的な実践や行動が欠けていることだと考える。例えば、学校や地域には多文化教育のプログラムがあるものの、それらは短期間で形式的なものであり、子どもたちの日常生活や教育に実際に深く関わることができている。また、多くの教師やボランティアは、文化差異による感情的な問題に対処する能力や、異文化交流の経験が十分ではない。

この問題を解決するために、子どもたちに異文化に関する知識を提供するだけでなく、実践的に異なる文化背景を持つ人々とどのように接するかを学ばせ、多文化コミュニケーション能力を養う。なお、地域や学校などの機関において、多文化背景を受け入れ、尊重する活動を増やし、子どもたちが日常生活の中で理解と尊重を感じられるようにし、文化差異による隔たりを減らす。こうしたことが求められる。



— 希望の家チーム —

コミュニティの情報発信！レク龍プロジェクト

担当教員：久保和之

(1) 取り組みの趣旨・目的

コミュニティの広報活動を学ぶために、各種事業に参加する。事業の補助や広報活動業務を実際に見て体験して学ぶ。社会の少子高齢化や情報化が進むとともにコロナ禍において、地方のレクリエーション協会では、スタッフの高齢化が進み、業務活動の継続が困難な状況が生じ始めている。社会的な組織の重要な業務のひとつに広報活動があり、それを担う人材の育成が重要視されてきている。そこで、地方団体の広報活動について、実践を通して学んでいく。

(2) 2024年度の取り組みの紹介

① 滋賀県レクリエーション協会 運営指導部会に参加

2か月に一度の定例会議に広報部の一員として参加し、広報活動の状況や計画を報告した。また、組織運営についての現状について学んだ。



初回の会議で自己紹介



抱負を表明

② 広報部の SNS 発信

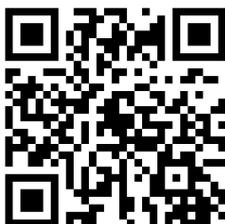
「Twitter」「Instagram」「Facebook」の滋賀県レクリエーション協会の公式アカウントを作成し、活動紹介や大会の情報などを発信した。毎回の講義開始時に「今日のレク」を受講生が実践し、それを SNS 発信材料として利用した。



X (旧 Twitter)
ID ; shiga_rec

Instagram
ID : shiga_rec

Facebook
ID : 滋賀レク



③

大津市真野浜にてフロートレース「浮き輪でGO！」開催

今年度は2回の開催予定だったが、2回目が台風による悪天候のため不開催となった。



真野浜水泳場
にて!!

浮き輪でGO!

開催決定!

8/9
8/28

参加費無料!

浮き輪でGO!とは...2人1組で浮き輪に乗る人と縄で浮き輪を引っ張る人にわかれ、早さを競う競技です! 素敵な景品が貰えるかも...!!

InstagramやTwitterから随時情報発信しています! 是非チェックしてみてください!!

会場: 真野浜水泳場 滋賀県大津市今堅田3丁目
開催日: 8月9日(金)、28日(水) 予備: 29日(木)
開催時間: 9時~12時 (★9時から整理券を配ります!
先着順となりますのでお早めにお越しください)
参加費: 無料!! ※1日16組限定です!!
主催: 龍谷大学社会学部社会共生実習生
アクセス: JR堅田駅から徒歩で約25分、JR小野駅から徒歩15分、湖西道路真野ICから車で10分
★お車でお越しの方は、一般駐車場1000円必須です

Instagram SHIGA_RED
Facebook
Twitter

④ 指導者養成講習会への参加および取材



講習会の様子



ゲーム体験

⑤ 高齢者サロンでのレクリエーション指導

大津市逢坂公民館および草津市矢倉まちづくりセンターにて高齢者を対象としたプログラムを企画運営



担当者と打ち合わせ



実際に指導

⑥ ホームページ作成

広報ツールとしてのWEB発信について理解するために、自分たちのプロジェクト紹介のウェブページを作成した。ホームページの仕組みについて学び、実際にHTMLのタグを使い、プログラミングを体験した。



画像の処理について



個人ページの作成中

⑦第78回全国レクリエーション大会2024とちぎ 視察報告

2024年9月6日～8日に栃木県宇都宮市で開催された全国レクリエーション大会に参加した。(以下、受講生の報告書抜粋)

〈総合開会式〉

2024年9月6日、13時30分～15時30分に第78回全国レクリエーション大会2024の総合開会式がライトキューブ宇都宮・大ホールにておこなわれました。

実行委員会会長の坂本宏夫氏によって開会宣言がおこなわれた後、彬子女王殿下をはじめとする来賓の方々からあいさつ、祝辞が述べられ、今大会に対する想いが参加者に共有されました。その後レクリエーション運動普及振興功労者の表彰がおこなわれ、総合開会式の前半は幕を閉じました。

開会式後半は、ゆりかご保育園園児による和太鼓演奏「玄武」でスタートしました。園児とは思えない力強い演奏に参加者たちは魅了されました。その後も認定こども園さくらが

丘園児による「とちまるくん体操」「ギョ！ギョ！ギョ！ギョーザ」の元気いっぱいなダンス、日光さる軍団による「おさるランドショー」、地元白鷗大学ハンドベルクワイアによるハンドベル演奏と栃木ならではのアトラクションで会場は大盛り上がりでした。華々しく大会のオープニングが飾られ、大会は最高のスタートを切ることができました。

〈交歓の夕べ〉

ライトキューブ宇都宮にてレクリエーション大会参加者の交流の場として交歓の夕べが開かれました。レクリエーション協会の関係者が集まり、歓談しながら会食を楽しみました。

挨拶はレクリエーション協会の専務である高木昭一氏がおこない、樋口修資氏が乾杯の音頭を執りおこない開始しました。ステージではスウィングハードオーケストラの方々が演奏され、演奏を聞きながら交流をし、親睦を深めました。会が中盤に迫ると愛知県レクリエーション協会の方々が兜や武将の格好をし、会場を更に盛り上げました。

それぞれが交流を楽しみ、栃木県レクリエーション協会副会長の村山哲也氏が中締めを行い交歓の夕べは閉会しました。



〈新紙「へえ〜」クイズ de ビンゴ〉

—Nice to meet you. 渋谷、津田、北里—

レクリエーション大会2日目の9月7日、10時～11時に私たちは新紙幣の肖像3人の生い立ちや業績を学ぶ事ができる研究フォーラムに参加しました。担当講師は、東京都レクリエーション協会副会長の澤内隆氏です。

2024年7月3日に発行がスタートした新紙幣、私たちはその肖像3人の名前こそは知っているものの、具体的にどんな事をされ、どんな業績を残されたのかは知らないのではないのでしょうか。私自身もその状態でしたが、この研究フォーラムに参加したことによって、楽しみながらそれらを学ぶ事ができました。

研究フォーラムはビンゴゲームを用いておこなわれました。用紙に16マスを作り、ビンゴゲーム定番の数字ではなく、新紙幣に関する3人のトリビアクイズに答えます。その解答を16マスの好きな場所へ書き入れ、ランダムに発表されクイズの解答が正しければ○をつけていき、ビンゴを目指します。

ただ学ぶだけでは退屈を感じるようなことでも、体験的に楽しみながら学ぶことで、退屈にならずに知識を身につけることができることを実感しました。

〈福祉施設における音楽レクリエーション〉

～音楽療法の視点を用いて～

本フォーラムでは、日本音楽療法学会認定音楽療法士である大島美知恵氏と久保田真由美氏を講師に迎え、福祉施設における音楽レクリエーションの具体的な活用方法とその効果について学びました。歌唱、楽器演奏、身体活動といった音楽を活用したレクリエーションを実際に体験しながら、それぞれの活動がもたらす身体的・精神的効果や活用方法について解説がおこなわれました。

歌唱活動は、場所や人数の制約を受けずに行える柔軟性の高い活動であり、参加・不参加の自由度が確保される点が特徴的です。歌詞を通じて情緒に働きかけるだけでなく、口腔機能や心肺機能の向上にも繋がること示されました。また、歌詞を利用した脳トレや手遊び、視覚教材との組み合わせにより、認知機能を刺激しながら楽しみを提供できる実践例が紹介されました。

楽器活動では、多種多様な楽器を用いることで、参加者の感覚や動作に働きかける手法を学びました。特に、ツリーチャイムやレインメーカーなど視覚や触覚を刺激する楽器が取り上げられ、音楽が身体的なリハビリにもつながる可能性を実感しました。また、布に鈴を縫い付けた「ミュミュール」など身近な材料で楽器を手作りする提案もあり、創造性を活かしつつ簡単に導入できる点に驚きました。

身体活動においては、音楽が動きを促進し、リズムやメロディーを通じて身体機能の向上を図ることができると示されました。特に、リトミックやフォークダンス、椅子取りゲームなどの活動が紹介され、音楽を用いることで社会性や認知症予防に寄与する可能性が示されました。

今回のフォーラムを通じて、音楽レクリエーションが福祉施設において参加者の身体機能や情緒、社会性の向上に大きく貢献することを学びました。また、フォーラム参加者同士で実際に楽器を演奏したり歌を歌ったりしたことで、音楽が初対面の人々をつなぐコミュニケーション手段としても有効であることを実感しました。音楽は道具や特別な場所を必要とせず、誰もが取り組みやすい活動であり、音楽レクリエーションの幅広い可能性を感じることができました。



〈ここからはじまる「学校レクリエーション」〉

～全国のみなさんとはじめまして！レク・レク・レクの大交流会！～

この研究フォーラムでは主に学校で子供たちと交流を深めることを目的としたレクリエーションを学ぶ内容でした。

さまざまな都道府県から来られた参加者が共に教え合い、学び合える場となっていました。

例を挙げると、みんなで栃木の名産品を体で表現するゲームやじゃんけん列車から派生した相撲の真似をしながら三人一組でおこなうどすこいじゃんけんなどをおこないました。どのレクリエーションも声や動作を使った内容が多く、年齢問わずお互い「ここはこうですよ」と教え合いながら自然と一体感が生まれるものになっていました。

参加者には、私のような受講生やレクリエーション協会所属のご年配の方々、実際に学校で勤務している先生、参加者のお子さんで小学生もレクリエーションに参加されていました。

フォーラムが始まってすぐは会ったばかりで皆が緊張していましたが、レクリエーションを通してさまざまな年代の方々が一緒に楽しめる空間が作られていてこの研究フォーラムの目的がしっかり達成されていると感じることができました。



〈マイナー競技をBAKUAGE（爆上げ）る〉

この研究フォーラムの講師・渡邊史郎氏は、元々ボート（2023年よりセーリング）の国体で当時優勝した選手のコーチを務めていました。しかし、セーリングという名称があまり世間では知られていない・定着していないマイナースポーツだったことを知り、埼玉県にある日本薬科大学でマイナー競技認知度爆上祭を開催しました。一般の方も入場が可能であり、この時はさくら祭と同時日程で開催することになりました。しかし、さくらがあまり咲いていないことから、さくら祭が中止になり、来場者が少なくなってしまう、大きな赤字という結果になりました。しかしながら、これらのマイナー競技で日本代表が誕生するなど、決して大失敗に終わったわけではありませんでした。

渡邊氏は今取り組んでいる企画やスポーツの現状についても話し、スポーツを勧める行政と自分に合うスポーツがない・楽しめるものがないといった私たちとの間で乖離が起き

ていると話しました。またその中では「スクエアボッチャ」など、年齢や障がいの有無に関わらず誰でも参加できる「ダイバーシティ」スポーツの存在についても言及しました。

最後に渡邊氏は町の文化とスポーツの結びつきについて話し、その中で、ものづくりの町・墨田区のモルックカバーの開発について言及しました。モルックはフィンランド発祥のスポーツで、モルックは木製である性質上、1年ほどで破損してしまうのだという。しかし、モルックの生産はTactic社が「モルック」の商標権を所有している関係で生産することができません。そこで、モルックが破損しないように墨田区でカバーを製作することになりました。このように、その地域・町との特色を上手くスポーツに結びつけることが、スポーツ促進のひとつのきっかけとなると渡邊氏は話しました。

〈レク実践に大切な活動分析を学ぼう！～個を大切にする福祉レク支援～〉

「個を大切にするととは？」

講師の森氏は参加者のニーズを知り、個々が自分らしく余暇を送れるように支援することとしました。余暇から、活動の好みがわかりその人自身の感じをつかむこともできます。

講義の中では実際にレクリエーションをおこないました。そのひとつがリング送りというものです。椅子に座った状態でストローを使って輪ゴムを隣の人へ送っていく。これをおこなった後、グループで活動分析をおこないました。活動をする上で、身体・知的・精神(情緒)・社会的機能のどのような機能を必要とするかを話し合いました。(わかりやすく、からだ・あたま・こころ・人間関係とした)

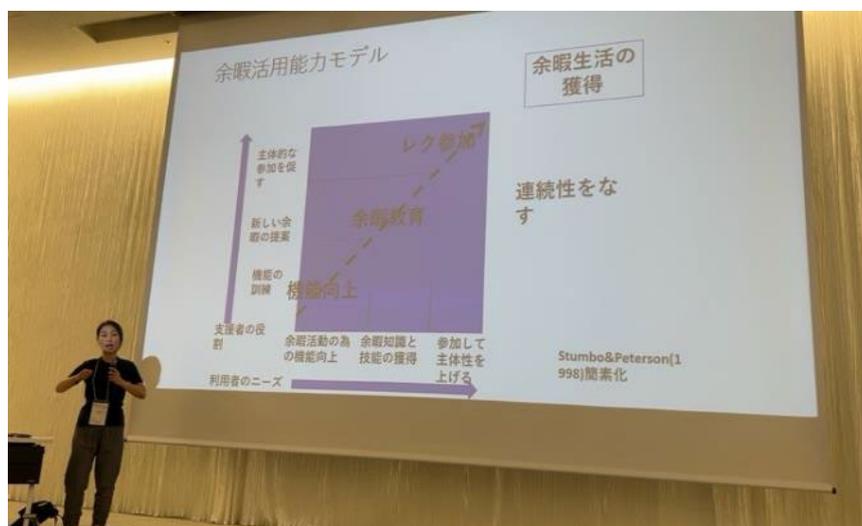
リング送りの活動分析

からだ	手を伸ばす・手で持つ・座位を保つ・手首を使う・目で見て距離を測れる
あたま	判断力・ルールを理解・方向感覚
こころ	喜び・緊張・達成感・意欲・勝ち負け
人間関係	グループの中で協力

このような活動分析から、どれかの機能がうまく使えない人に対してどのようにアレンジするかを考えました。例えば、手にものを持つことが苦手な人に対してはストローを太く軽い別のものにする・ストローを口にくわえておこなう。また、判断が難しい人を参加させないのではなく声だけや応援として一緒にその場に参加するという声もあがりました。

ルールのある遊びの中で利用者全員がどのくらいルールを理解することができるのか、守ることができるのかを私たちがしっかりと理解し、レクの内容をアレンジしていかなければ

ればならないことを学びました。できない人を諦めるのではなく、その人も含めた全員で楽しめるものを見つけていかないといけないと感じました。また悩んだときは、この講義でおこなったように活動分析をおこない、どのような機能を使う活動であるのかを改めて確認する時間を作りたいと思いました。



〈身近な生活用品を活用してレク素材の幅を広げよう！〉

～個人支援につなげる 拡張性のある素材づくりとその考え方～

全国レクリエーション大会 2 日目に講師として日本レクリエーション協会公認のレクリエーション・コーディネーターである三浦一郎氏の指導のもと、身の回りの生活用品を使ったレクリエーションを学びました。この講義にはレクリエーションの参加に対するハードルを下げるためレク素材の準備を一般的に手に入りやすいということを基本にルールのアレンジや対象者への配慮等が考えやすく、福祉現場の様々な対象者にフィットする素材を提案し、具体的な進め方や考え方を学ぶという思いが込められています。講義の内容はピンポン玉と卵ケースとペットボトルを切り取ったものでボトルを起こすボトルアップや新聞紙と空きペットボトルを利用したミニ・テーブルクロス引きなどのどれもが日用品や 100 円ショップなどで簡単に入手できるもので成立することができるものとなっていました。このような簡単な物だけでも十分に楽しむことができ、アレンジを加えることができるという点に、よりレクリエーションの可能性を感じました。

〈能登半島地震の取り組みから再考する〉

復興支援におけるレクリエーションの役割

9月7日13時～15時、第78回全国レクリエーション大会の2日目ではライトキューブ宇都宮にて令和6年能登半島地震を題材にした研究フォーラムが開催されました。担当講師は前田優子氏、宮西好子氏、高康紀氏の三名で三者ともに能登半島地震を経験しました。

この研究フォーラムでは、能登半島地震の現場で何が起きていたのか、心の元気をつくるために「レクリエーション」には何ができたのかなどを現地の写真を基に学びました。現場では何が起きていたのかを経験談から詳しく話されていました。まず、安否確認が大変だったそうで、一人ひとり名前を聞いて記入するという作業を冬の寒空の下でしていたそうです。また、全国から届く物資の仕分けも大変だったそうで、ランチパックなど賞味期限の短い食べ物が多く届いたそうです。下着問題も深刻だったそうで若者向けのものが多く、老人が困りました。また、切れない下着なども混ざっており、問題視されたそうです。避難所も大変でやはり赤の他人と何夜も過ごすことでトラブルが多々あったと話されていました。

次に避難所での「レクリエーション」の役割を学びました。「レクリエーション」は心の安らぎとなっていたそうで、高齢者が多いため、はじめは椅子に座ってできる体操で徐々に脳トレなどを加えていき、最終的に1回60分のレクタイムになったそうです。参加者は初め数人だったが、徐々に数を増やしていったそうで、これには23歳の講師の方がよりどころになり、講師に会うために特に高齢者の参加者が増えたと言っていました。

この研究フォーラムでは現地にいないと知りえない、リアルを聞くことができました。避難所生活の過酷さやたびたび起こってしまうトラブルなど自分がその場にいたら冷静でいられるだろうという考えを一変させるような内容でした。もしも自分の身に起こった場合、どう動くのか、それを問われた気がしました。この研究フォーラムで聞いたことを忘れずにもしものに備え、日ごろから考えて生活していくことが大切だと感じました。

〈介護支援で育む〈ふ・れ・あ・い〉音楽レクリエーション〉

このプログラムは手作りの「その年に流行した代表曲年表」を片手に楽しく踊ったり、語り合ったりリズム集中体験といったプログラムです。音楽は、それ自体、人の心得を揺り動かす力を持っています。一方で介護施設の利用者の方々や高齢者サロンに通う方々は、それぞれの貴重な歴史を背負っています。いくつになっても音楽は人を動かします。このレクリエーションでは4つのプログラムをおこないました。

まず初めに、「何はともあれ歌いましょう」と朝ドラで有名になったあいみよんの「愛の花」をその場にいる全員で歌いました。参加者の大半が高齢の方だったものの、朝ドラの主題歌となると若者を中心に人気のあるあいみよんの曲も歌えていました。私よりも完璧に歌えている方も多く驚きました。

2つ目のプログラムとして、誰にでも歌える歌として「いい湯だな」「東京ブギ」の2曲を歌いました。「いい湯だな」はサビしか知らなかったけど初めて最初から最後まで歌詞を知りました。4番まであることを初めて知って驚きました。「東京ブギ」はクリアアサヒのCMの曲だと思っていたけど原曲があったことに驚きました。同じように若い世代の人はクリアアサヒの歌だと思って原曲を知らない人が多いと思うので、原曲自体を知ってもらう機会を作りたいなと思いました。

3つ目に介護の現場で人気のプログラム「歌合戦」を紹介してもらいました。どんなプログラムかという、「歌いだしが「あ」から始まる歌は？」という設定した設問を挙げて、分かった人は早いもの順で真ん中にあるマイクでその歌を歌う」という内容です。実際におこなっていませんでしたが、年代問わず早い人がマイクを取りに行き、歌った曲で懐かしむ素敵な時間を過ごしました。

4つ目のプログラムは部分ハーモニーで「happybirthday」の歌を歌いました。全員で歌うことでさらに場が和み、声が出やすくなりました。私はこのレクリエーションを通して、歌の可能性を感じました。高齢者の方が昔の歌を楽しく歌ったり動いたりしている姿をみて、認知症の予防や運動不足の解消に繋がりそうだと思います。若い世代の人が昔の歌を知ることによって高齢者の方との交流に繋がることを実際に体験して、昔の歌を知る機会が必要だと学びました。

〈対象者に合わせてレク財をアレンジしていくことを実際にレク体験をしながら考える〉

第78回レクリエーション大会9月7日、13時～14時に私たちはレクリエーションのアレンジについて学ぶ研究フォーラムに参加しました。担当講師は、愛知県レクリエーション協会副理事長である鯖戸善弘氏です。

レク支援者やレクゲームを活用される方の中には、「ネタ切れ」となっている方もいるかもしれません。しかし、既存のレクリエーションをアレンジすることでゼロからレクリエーションを考えるよりもハードル低く、レクリエーションを提供できるのではないだろうかということによってその勘所を実際にレクリエーション体験しながら学びました。

この研究フォーラムは既存のレクリエーションを名古屋めしアレンジしたものを体験しながら学ぶ研究フォーラムで、はじめにアイスブレイクとして名古屋めしを使った自己紹介をおこなった後「餃子じゃんけん」のアレンジとして「天むすじゃんけん」や、「天狗の鼻」のアレンジとして「おいしいよー、味噌カツ」など既存のレクリエーションを名古屋めし風アレンジをしたものを実際におこないながらレクリエーションを学びました。「動きや速さを変える」「掛け声を変える」「人数を変える」などレクリエーションのアレンジに必要な視点を学び、ネタ切れとなりがちなレクリエーションでも、少しのアレンジを加えることで新たなレクリエーションになるということを実際にレクリエーションをおこないながら学ぶことができました。

(3) 2024年度の取り組みの成果と課題

本プロジェクトは一昨年度から引き続き、3年目だった。昨年に続いてベースができたうえでの活動となった。全体的に見ると十分な成果があったように思う。まずは、昨年に引き続き、何度も現場に出向いてたくさんのことを学ぶことができた。実際に現場に出向いて活動することによって、それぞれの事業について身をもって理解できたと思う。滋賀県レクリエーション協会という団体の情報発信がメインであったが、まずは現状を知ると

ともにその解決方法を探り試行錯誤していくというプログラムである。

活動のひとつである SNS 発信は前年度の反省を生かし、理論的背景を学んでいくつかの技法を試したことによりフォロワー数や閲覧数を伸ばすことができた。なかには数千回以上の再生がなされた投稿もあり、明らかな進歩がみられた。

学生企画のフロートレースでは、昨年に引き続き広報活動としてポスターを作成し、掲示するところまで進めることができた。今年度は、新たにチラシ配布を実践することができた。さまざまな広報活動を実践することによって作成する方法や業者、手続き、作業などを学べた。また、悪天候による雨プロやリスクマネジメントの重要性についても理解を深めることができた。

昨年に引き続き、全国レクリエーション大会（宇都宮市）に参加し、全国のレクリエーション実践者の研究発表や実践報告を聞くことができ、参加者との交流をとおして課題解決に向けてあらたな側面を知ることができた。

今年度は新たに地域でのレクリエーション指導をする機会を設けた。高齢者向けのレクリエーションを考案し、実際に現場で指導体験をすることができた。

課題としては、受講生の人数が増えたことによる役割の減少があげられる。今年度は講習会やフロートレースの回数が減ったことにより、現場での活動が減少した。また、地域での活動は、祝日や夜間に開催されることが多く、サークル活動やアルバイトとの兼ね合いで参加できない学生が見られた。

（４）受講生の感想

社会学科：東 侑弥

① 活動するうえで直面した困難や葛藤

「浮き輪で GO！」を進行するうえで感じた困難は開催までの過程だ。真野浜水泳場の下見やリハーサル、ポスター作成など本番までにすべきことがたくさんあった。特に大変だったのはリハーサルだ。本来、リハーサルでは本番と同じタイムスケジュールでコース設営から第 1 レースまでをおこなう予定だった。しかし、リハーサルの日程を日曜日に設定してしまったことで来場客が多く、また、強風の影響で波が荒れていたこともあり、全く予定通りおこなえなかった。最終的に 1 レースだけ試走したが、段取りが悪く、ほぼ意味のないリハーサルになってしまった。来場客が減るのを待っている間にもできることはあったはずだが、何もしなかったことは反省点だった。

② 活動したことによる周りの変化や連携先に対する影響

連携先に対する影響は非常に感じる。平日の真野浜を盛り上げるため、ゴザ走りのおまけイベントとして「浮き輪で GO！」を開催した。当日はゴザ走りに来ていた人にも参加していただき大盛況だった。「来年もしたい」という声もいただけた。また、ゴザ走りのお手伝いに行った時も参加者から感謝の言葉を頂けた。平日の真野浜を盛り上げるという

目標に貢献できたと感じる。

③ 「社会共生実習」を受講したことで起きた自身の変化や感じた成長

自分の変化において、受講前と比べて人と話す力が身についたと思う。実習では、連携先をはじめ、多くの人・年代の方と話す機会が多かった。コミュニケーションをとって行く中で自然と人と話す力が身についた。また、実習を通して人前に立って話す機会が多かったため、人前でも緊張せずに話せる力が身についた。受講前と比べ、大きな成長だと思う。

○3年間の総括

まず、1年目は SNS 発信やレクリエーションのことなどほとんどわからない受講だった。特にレクリエーションについてはインストラクターがいることをはじめて知った。インストラクター養成講習会に参加してインストラクターの高齢化という現状を知った。これを知ったことで、SNS 発信では若者に向けた発信を心がけることができた。2年目は1年目にはなかった全国レクリエーション大会を経験した。この大会では、数多くのレクを体験し、開催地徳島にちなんだ阿波踊りなどをみた。また、全国のレクリエーションに関わる方たちと話をすることができ、良い経験となった。3年目は1, 2年目の経験を生かして取り組んだ。後輩が増えた分、教える立場となり、はじめは苦戦した。リーダーではないのに場を仕切っていたことも多々あった。しかし、言わなくても自ら行動できるメンバーが多く場を仕切ることも次第に減っていったと感じる。また、初めて高齢者に向けてレクリエーションを行う機会があり、緊張したがやり遂げることができたと思う。

「浮き輪で GO!」では、1年目より2年目、2年目より3年目とメンバーが増えていった分、役割を増やすことができ、年々改良されたイベントになったと思う。「浮き輪で GO!」はルールなど1から企画し、景品なども考えた分、レク龍では1番印象に残っている。社会共生実習の活動報告会でも1番話しやすく、胸を張って楽しいイベントだと言えた。レク龍は広報がメインだが、3年間受講して、「浮き輪で GO!」があつての広報だと感じた。来年度以降も続いてほしいと思う。

最後に、レク龍で3年間活動して様々な事を経験することができた。また、自分自身もコミュニケーション能力が身につき、人前でも緊張せず話すことや、レクリエーションをできるようになり、成長できた。3年間受講し続けてよかったと思う。



(5) 2024 年度活動報告会の発表ポスター

コミュニティの情報発信！ レク龍プロジェクト



facebook



X

Instagram

本プロジェクトの背景

高齢化により業務活動の継続が困難になっているレクリエーション協会には、組織の重要な業務として**広報活動**がある
広報活動を担う人材の育成が重要
→レクリエーションを中心とした地方団体の広報活動について、実践を通して学んでいくプロジェクト

広報活動

・滋賀レクのSNS発信(Instagram・X・Facebook)メンバーの中で役割分担を行い、レクリエーションの発信やレクリエーション講習会で学んだことやイベントの告知を行った。

・滋賀レクのお便りの作成
滋賀県レクリエーション協会のお便りの発送作業のお手伝い

反省点

・ネタ切れになることがあり、講習会やレクリエーションなどでもっと写真をとったりお話を伺えば良かった。

・投稿内容に関しても編集などをもっと行い目を惹かれるような投稿内容を作成出来ればより良い広報になるのではないかと感じた。



高齢者向けのレクリエーションを企画・運営

逢坂公民館・滋賀県レクリエーション協会と協力し、私たち自らが企画・運営までを行うレクリエーション講習会を実施。
11月5日に逢坂公民館で、翌6日に矢倉まちづくりセンターにて開催。

1. 企画の立案・改善

- ・6月末より企画立案を開始
- ・逢坂公民館や滋賀県レクリエーション協会の方々と、企画内容について協議(レクリエーションの進め方など)
- ・高齢の方でも楽しめるよう、何度も企画案を修正



2. 学んだこと

- ・レクリエーションをする対象者に合う、楽しめるレクリエーションを考えるのが難しかった。
- ・レクリエーションを実施する上で、より目的を明確にし、理解しておくべきだった。
- ・高齢者の方と私たちに距離があった。
- ・ルール説明の際、分かりやすく説明できなかった。
- ・私たち教える側でのルールの認識が曖昧な箇所があった。
- ・安全確保の重要性に気付いた。



浮き輪でGO!(浮き輪レース)の企画、運営

8月9日、28日の2日間に渡って、滋賀県堅田にある真野浜水泳場にてレク龍メンバーが**浮き輪レース**を企画、運営した。

1. 当日までの準備

・広報用ポスター、チラシ作成
広報のため、ポスターを大学内や堅田駅に掲示した。また、チラシを作成し真野浜水泳場にいるお客さんに向けて配布した。

・役割分担

受付やお客さんの補助などレースをスムーズかつ安全に行うために全員で分担して取り組んだ。

・保険の手続き

レースは湖内で行われるため万が一に備えて参加者に大学支給の保険加入をお願いした。



2. 学んだこと

企画を一から最後まで自分たちで行ったことによりお客さんが楽しめるための内容を考えることから集客のための広報や安全のための保険の加入など1つのイベントを行うのに必要なことを実践的に学ぶことが出来た。

また、2日目である8月28日は台風の影響により中止となった。早めに天候を確認し、中止や延期など対応について考えることが必要だと学んだ。



全国レクリエーション大会への参加

9月6日、7日、8日の三日間に渡って、栃木県にて行われた全国レクリエーション大会に参加

1. 当日の内容

・研究フォーラム
アイスブレイクやマイナースポーツ、福祉施設でのレクリエーションなどのさまざまな研究フォーラムが開催され、私たちは分担し合計13のフォーラムに参加した。

・交歓の夕べ

初日の夜に行われた交友を深める会でスウィングハードオーケストラの方々が演奏され、演奏を聞きながらの食事を通して参加者の方々と交流を深めた。



2. 学んだこと

今回、研究フォーラムや交歓の夕べに参加することで今までの知識になかったようなレクリエーションを学んだり、他のレクリエーションインストラクターと交流することができた。
また、参加した研究フォーラムの中には実際にレクリエーションを行いながらレクリエーションを学ぶものも多かったため自分自身がレクリエーションを行う際にどのように進行をすればいいのかなどを学ぶことができた。



農福連携で地域をつなぐー

「地域で誰もがいきいきと暮らせる共生社会に向けて」

担当教員：坂本清彦

(1) 取り組みの趣旨・目的

障がい者の雇用機会拡大と農業の担い手確保を主な目的として普及してきた農福連携事業は、近年、農福連携が障がい者だけでなく高齢者やひきこもり者も含めた多様な人をつなげ、地域づくりの契機としても注目されている。その一方で、農業や福祉関係者以外には、農福連携という言葉自体も広く認知されているとはいえない。

本プロジェクトは、滋賀県栗東市で農福連携を通じて地域社会をつなげてきた障がい者支援組織の事業「おもや」で、障がいを持つ利用者やスタッフとの農作業や地域の朝市への出店など、農業と福祉が交差する多様な活動に参画して、農業や福祉の課題を学び、多様な人々がどう働き、生き、つながっていけるのかを考え、課題に解決に向けた小さな実践を目指した。具体的には、農業や福祉領域以外の幅広い人たちに「農福連携」の認知度、理解度向上を図る活動を取り入れた。

また利用者、スタッフ、行政など関係者へのインタビューといった社会調査や、イベントの企画準備運営などプロジェクトマネージメント的な実践経験を通じ、受講生が座学と現場を往還しながら複層的に学ぶ実習活動の仕組みを作った。

(2) 2024年度の取り組みの紹介

本プロジェクトは基本的に学期中の毎週金曜日の午前中におもやで活動した。4年目に入った本プロジェクトはおもやの方々にはすでに認知され、温かく受け入れていただいた。何人かの利用者やスタッフと受講生は仲良くなり、毎回様々な話をするような関係を築けています。昨年度以前から継続受講した受講生が新しい受講生にアドバイスや説明をしてくれたため、受講生皆が現場作業に円滑に入ることができた。

昨年度同様、受講生にはさまざまな作業を経験してもらった。前期、後期を通じて、トマトの誘引（ひもで主幹を支柱に固定すること）や脇芽とり、ねぎ苗の草引き、マルチシートや作物残渣の片付け、種まきから収穫まで種々の圃場作業や、野菜の調整や袋詰めといった出荷準備作業を、受講生がおもやの方々と一緒におこない、作業の説明やたわいもない会話も含めたコミュニケーションを通じて関係性構築を図った。

受講生は、さまざまな農作業を通じて、農業が天候に左右され、時に重労働も伴い、地道な作業の繰り返しであることなど、その大変さを改めて認識した。一方で、慣れることで作業がうまくいくようになり、他の人との共同で作業を完遂させることの楽しさや、自然の中で身体を動かす農作業の良さを学んだという声もあった。



▲トマトの誘引作業

受講生は4月から5月にかけて毎週のようにこの作業を担い、トマトの成長の早さに驚かされるとともに、当初は見分けがつかなかった脇芽のとり方にも習熟していった。

また、地域住民との交流を図るため、栗東駅近くの大宝神社が毎月1日に開催する朝市におもやスタッフと利用者とともに6月1日と11月1日に参加し、たき火を起こしてお茶を沸かし参拝に訪れた人たちに振る舞った。受講生たちは宮司さんから神社の由来を伺ったり、神社に訪れた方々と会話を楽しんだり、地域社会に自然に入っていくことができた。農福連携をおこなうおもやは障がい者の就労支援や農業をおこなうだけでなく、こうした場を通じて地域の人びとのつながりの拡大にもつながっていることを、受講生は学んだ。



▲大宝神社の朝市

たき火を起こしてお茶を訪れる方々に振る舞って交流したり、宮司さんから神社の由来についてお話を伺ったり、とても豊かな時間となった。

またこれまでと同様、社会調査手法のトレーニングを兼ねて、農作業の参与観察やおもやの関係者や利用者へのインタビューをおこない、農福連携の現実やおもやの方々の思いを学んだ。またおもやの立ち上げ時から協力して農福連携事業を進めてきたNPO 法HUB's 代表の林正剛氏と利用者1名にインタビューし、それぞれのご経歴や、農福連携事業の現状、課題とそれに対する思いなどの聞き取りをした。利用者の方はハーブを練りこんだクッキーを発案し、実際におもやの商品として採用された経験を語ってくれた。このクッキーは「とてもおいしい」と受講生の間でも大人気で、それをその利用者の方が開発したことに感銘を受けていた。受講生は、普段の農作業では話題に上がらない農福連携の可能性や、利用者がどのように活躍されているかを学んだ。

また、今年度は新たな試みが2つあった。

新たな試みの1つ目は行政機関への聞き取り調査である。7月12日に近畿農政局（京都市上京区）を訪れ、国（農林水産省）による農福連携支援制度についてお話を伺った。受講生には聞きなれない用語も交えた説明でしたが、スタッフの皆さんが懇切丁寧に説明してくださいました。熱心なご説明のおかげで、受講生は農福連携推進のための交付金制度の内容や仕組みをおおよそ理解することができた。受講生からは「難しい用語も多かったですが、とても丁寧に説明してくださいまして、自分の中に知識として落としこむことができました。多様な支援の形を知ることができ、視点が広がりました。」と言った感想が出された。



▲近畿農政局での聞き取り

普段耳にすることのない行政用語などもあり理解が難しいこともあったが、職員の方々の丁寧な説明で農福連携への国の支援制度の概要を学ぶことができた。

新たな試みの2つ目は「流しそうめん」である。おもやの利用者・スタッフと受講生の交流を深め、受講生の企画力などを向上させるため、7月26日に瀬田学舎の Global Lounge & Kitchen にて「流しそうめん」をおこなった。おもやの方々も、持参していただいたプチトマトや薬味の下準備や流しそうめんのセッティングを受講生と一緒におこなった。流したそうめんをこぼさずにしっかり掴める人、うまく掴めない方がいたりして笑いもおき、おもやの方々と受講生と一緒に楽しめる機会になった。受講生たちからは、おもやの方々が大学に来たこと自体を楽しみ、そうめんを「美味しい」と言って喜んでおられたので、流しそうめんを企画して良かったといった感想が出された。



▲瀬田学舎での「流しそうめん」

おもやの利用者の方々と一緒に準備して流しそうめんを楽しんだ。浴衣を着てきた学生もいて周囲からも注目を集め、おもやの方々と楽しく交流する機会となった。

一方で、昨年度から継続して実施したイベントもある。農福連携・おもや・障がい者福祉・農業について学生や教職員に知ってもらうこと、受講生の課題把握力・企画力・実行力・コミュニケーション・交渉力を向上させることを目的とし、おもやで栽培されたさつまいもの焼き芋などを12月13日に瀬田学舎で「おもやマルシェ」と題して販売した。マルシェの開催にあたり、受講生たちはチラシやプロジェクト紹介ポスターの作成、ポップ作り、大学職員の方々にお力をお借りして開催場所の確保と設定などの準備作業をおこない、当日はさらに深草学舎の経済学部 西川ゼミの皆さまにもお手伝いいただいた。マル

シェでは、焼き芋の他に、クッキー、パウンドケーキ、ドーナツなどを並べ、昼休みには用意していた焼き芋が大人気で終了時間前に全部完売した。また、農福連携やおもやについて知ってもらうためポスターを作成し、農福連携についての知識、ポスターを見て気になった点、今回のマルシェについて、来訪者の意見や感想を書いていただきました。盛り上がったマルシェでしたが、焼き芋がすぐに売り切れてしまったことなどから、受講生からは「もっと多く商品を仕入れたり、マルシェのもっと開催することを来年度以降検討してみてもよかったのではないか」といった感想も出された。



▲瀬田学舎での「おもやマルシェ」

おもや利用者・スタッフ、大学職員、深草学舎経済学部西川ゼミ生など、多くの方々のご協力「でマルシェを開催し、農福連携・おもやについて学内の方に知ってもらう機会とすることができた。

最後に2024年度「農福連携プロジェクト」の締めくくりとして、2025年2月5日におもやの方々と手作りの「味噌づくり」に取り組みました。おもやでは、自分たちで収穫した大豆や黒大豆も使って冬季に味噌を仕込み、利用者・スタッフの昼食や、付設のカフェレストランで提供するお味噌汁に使っている。受講生は味噌の仕込み作業に参加し、スタッフや味噌づくり経験の豊かな利用者から、実際に作り方を学びんだ。



▲おもやでの味噌づくり

経験豊かなおもや利用者さんにならないながら味噌づくりを学んだ。

(3) 2024年度の取り組みの成果と課題

前年度までの実習活動の反省をいかし、余裕をもったスケジュールや夏期の熱中症予防など安全にも配慮した活動内容とすることができたと考えている。

2024年度は活動の幅が広がったこともあり、受講生が学んだこともこれまでより広範囲にわたり、また充実したものだ。前年度に企図していたものの実施できなかった大宝神社の朝市などにも参加でき、おもやが農福連携事業を通じてどのように地域社会とのつながりを作っているかを実地に学ぶことができた。また暑熱を避けて7月には近畿農政局にてお話を伺い、農福連携が制度としてどのように支えられているのか、行政の役割などとあわせて学ぶことができた。

おもやの皆さんに実習について十分に認知していただいたこともあり、普段の農作業やイベントなどの際も利用者・スタッフと受講生の間で、自然な会話が交わされ楽しく活動できるだけでなく、受講生がこれまで関わることの少なかった障がい者とコミュニケーションをとることで、その理解を深めることができたと考えている。

課題としては、おもやのスケジュール上、平日の午前中に実習活動が限定されるため、必修科目を抱える学生には受講が困難という点があげられる。原則金曜日午前中に設定されている作業に他の授業の関係で参加できない学生のため、別の曜日に活動できるようおもやの皆さんに調整いただくなどで対応した。ただ、社会学部が深草学舎に移転する2025年度からはこうした調整がさらに困難になる可能性があり、その点の解消が課題となると考えられる。

(4) 受講生の感想

社会学科：池野史哉

(本プロジェクトを3年連続受講)

今学期は、体調不良で報告会に参加することができなかったことが非常に残念であった。そのようなことがありながらも、特に印象的な経験が2つあり、そこから多くのことをさらに学ぶことができた。それらの経験をひとつずつ挙げ、学べたことを述べていく。また、最後に実習に参加した3年間の自分自身の変化を考えてみる。

1つ目は、金曜日以外の実習日に参加したことである。今学期の水曜日の実習に数回であったが朝礼から参加してみて、スタッフの方も利用者の方も含め、全員で誰が、どこで、どの作業をするかなどを細かく共有しており、私自身が就職をしてからも、その時に見たような丁寧な情報共有などはしっかりおこなっていきたいと考えた。また、金曜日とは違って実習メンバーがふたりという少人数で、一つひとつの作業の負担が大きくなり、疲れが今までよりも早くたまったため、私の卒業論文のテーマでもあった「人手不足」というものを認識した。しかし、その分コミュニケーションの面で、ほとんど同じ人と実習の時間中に会話したため、特定の人になるが今まで以上におもやの方を深く知ることにもつながったと認識した。

2つ目は、マルシェの奥深さを知ったことである。今年はおもやとの調整の担当をおこない、どの商品をどの価格で販売するかなどを考えることが非常に困難であった。当日はポスターや宣伝の効果もあって、マルシェ開始から1時間足らずで全ての商品が完売し、昨年度よりも多くの利益を出すことができ、喜ばしく思った。しかし、予定していた実施時間よりも早く終了することになってしまったので、もっと多く仕入れる必要があったとも捉えられる。昨年度のマルシェを覚えていて、来てくださった方が何人かいらっしやったため、今年でさらに多くの方に知ってもらうことができたため、さらなる利益を出せると考える。しかし、このマルシェは「農福連携やおもやのことを知ってもらう」という目的も含まれているため、それらの宣伝にもつなげられるようなことにも困難な部分があり、さらに関心を持った。

最後に、3年間を振り返って、障がいを持った方と関わることだけでなく、マルシェやオープンキャンパスや大学の講義で実習の宣伝をおこなうことなど多くことを経験させてもらうことができた。しかし、主体的に取り組む姿勢がまだまだ弱いと認識している。具体的に今学期のマルシェの作業負担の偏りがあった時やポスターの作成が遅れている時にもっと動くべきだったと考えている。この実習のようにチームで活動していく場面は今後も多々訪れるため、ひとりの人に作業負担が大きくなってしまったら自分から積極的にフォローに入るのはもちろんのこと、周りの協力を仰ぐこともするといった、状況に合わせた行動ができるような社会人を目指していきたいと考える。

(5) 2024 年度活動報告会の発表ポスター

社会共生実習 農福連携プロジェクト

地域で誰もがいきいきと暮らせる共生社会に向けて

1. 実習の目的

『障害者だけでなく、高齢者や生活に困難を抱える人々など、支援を必要とする人々が農福連携を通じて地域の様々な人々とつながり、生き生きと暮らせる共生社会の実現を目指し、そのための課題を見つけ、解決策を考え、実践することを目指す。』

2. 農福連携とは何か？

○農福連携

“障がい者の方に農業に参加してもらうことで、社会への参加を促進する取り組み” また “農福連携とは農業の課題と福祉の課題（障がい者等の課題）双方の課題を解決するための取り組み” のことです

農業の高齢化による人手不足
(農業面)



障がいを持つ方の働く場所が少ない
(福祉面)

地域の多様な関係者とつながり生き生きと暮らせる**共生社会の実現**を目指しています！



3. 実習の受け入れ先について

○NPO縁活 おもや

障がい者、高齢者、生活困窮者らが農業に携わる「農福連携」を実践しており 自然栽培で野菜を育てており、育てた野菜を使った料理を“おもやキッチン”で提供しています。



おもやでは、農福連携を通じて特に
地域の方々との繋がりを築くこと
を大事にしている！



4. 知る・学ぶ

○農作業

おもやのスタッフ・利用者様に教えていただきながらおこないます。黙々とおこなう作業や力仕事など、どれも欠かせない作業です。おもやでは農業・化学肥料を一切使わずに野菜を栽培しており、滋賀県内のスーパーだけでなく、高級料理店にも出荷しているとのこと。

○あるきだす

過疎化が課題である、栗東市の金勝（こんぜ）地域にある古民家を改修してつくられたNPO 法人縁活の第二拠点です。

この地域を元気づけるために農作業を通じて地域の人びととのつながりを築いています。

○農福連携についてインタビュー

農福連携について学ぶため、NPO法人HUB's代表の林 正剛（はやし まさたけ）さん、おもやを利用している田中さん、農林水産省近畿農政局にインタビューを実施しました。農福連携について、NPO法人代表、利用者、行政の立場のそれぞれの視点から見た農福連携について、お話を伺うことができ、日頃の作業だけでは分からなかったことを学ぶことができました。



5.交流

○大宝神社の朝市に参加

栗東市にある大宝神社、毎月1日に開催する月次祭（つきなみさい）にあわせて「朝市」が開催されます。今年度は2回参加させていただきました。

おもやさんの商品等の販売、たき火で沸かしたお茶を参拝者にふるまうなどしました。

朝市に来られた方に「農福連携」の取り組みを知ってもらうきっかけになって嬉しいです。

また、地元住民との交流も深めることができ、地域社会の輪を広げることができたと感じています。

○流しそうめん

「おもや」の方々への感謝の気持ちを伝え、交流する機会を作ろうと私たちが「流しそうめん」を企画しました。

そうめんをゆで、流し、キャッチする。上手く掴めたり、掴めなかったり。「おもや」の方々と一緒に楽しむことができました。

「おもや」で取れた野菜なども持ってきてくださり、そうめんと一緒に流したりしました。

また、「おもや」の方々が大学に来てくださること自体もすごく楽しんでくださったので企画してよかったです。



6.伝える(農福連携の発信)

○12/13(金) 龍大オモヤマルシェ 開催

おもやさんや農福連携の取り組みについて、龍大生にも伝えるためにマルシェを開催しました。マルシェではおもやさんが作ったお芋で作った焼き芋や、焼き菓子などを販売しました。またおもやさんや農福連携についてのポスターを制作し、アンケートも実施しました。

当日、焼き芋は開始30分程度で売り切れ大好評でした。その後焼き菓子も完売し、売り上げも去年より上がりました。

当日は利用者さんや経済学部のゼミ生4名にも手伝ってもらいながらの、運営でした。慣れないこともあり、バタバタした一日でしたが、沢山のの人に農福連携について伝えることができた素敵な機会になりました。



アンケートの実施

概要：マルシェ時に農福連携のこと、おもやさんのことについて知ってもらう目的で、意見や感想を答えもらった。

結果：今回のマルシェを通して、「農福連携」という言葉に多くの人が触れる機会となり、魅力が伝わった。また、販売物はどれも高評価だった。

課題：去年のマルシェを覚えてくれている方が多くいたため、予定していた時間よりも早く完売してしまった。そのため、より多く商品を仕入れたり、マルシェの開催頻度を増やしたりすることを来年度以降検討してみる。

7. 学んだこと

- ・農福連携という取り組みの魅力を知ったのと同時に、「農家と福祉施設のマッチング」等などの課題があることから取り組みの難しさを感じました。
- ・「農福連携」の周知がまだまだであるということ、そして発信の難しさを感じました。
- ・障がいを持った方の能力を生かす形の一つが農業であることを知りました。
- ・毎週畑に向かう度に野菜たちが大きくなっていて、畑のやりがいを感じました。
- ・農福連携がただの美しいだけの仕組みではなく、仕組みとしてもwin-winになる取り組みであることを学びました。
- ・利用者さんとの作業を経て、障がい者の方はカテゴリで分けられているだけの健常者と変わらない一人の人間であることを学びました。
- ・マルシェを通して、自分たちでスケジュールをたて行動していくこと、グループでの活動がすごく難しいことを学びました。
- ・「交流を大切に、縁を大切に」これを大事にしていこうと思いました。

担当教員：坂本清彦

チームメンバー：池野史哉 高嶋大晴 山川真依 坂本瑠璃子 松浦晴香 横山寛治 木下遼一朗 中國美紀 岡本昂大 中山莉乃

お寺の可能性を引き出そう！

—社会におけるお寺の役割を考える—

担当教員：猪瀬優理・古莊匡義

(1) 取り組みの趣旨・目的

本プロジェクトでは、お寺を中心に地域社会で展開されるさまざまな活動に参画しながら、現代社会におけるお寺の可能性について考えることを目指した。ここで言う「さまざまな活動」には、お寺が主催する活動だけでなく、仏教の信仰をもつわけではない個人や団体によるお寺を拠点にした活動や、お寺と協働して実施する活動も含まれる。

近年の少子高齢化や過疎化の状況の中で、檀家との関係だけでは維持できないお寺がますます増えており、葬儀の簡略化などを受けて、仏教の存在意義が問われる状況になっている。また、お寺は全国にコンビニよりもたくさんあるが、必ずしも檀家以外に門戸を開いているわけではなく、とりわけ若者からは入りづらい場所、縁遠い場所として捉えられている。

このような状況を受けて、檀家に限らず、地域とのつながりを重視し、こども食堂や高齢者向けのサロンなど、地域のつながりや居場所を作るためのさまざまな社会活動を実施するお寺が近年増えてきている。また、地域住民をはじめ、お寺や仏教と深いつながりをもたない人も含めた多くの人々に門戸を開き、さまざまな方や団体にお寺を活動拠点として提供する事例も少なくない。お寺は、仏教の信仰をもつ人にとっても、もたない人にとっても社会活動の拠点となる可能性を秘めている。

そこで、本プロジェクトでは、地域社会とつながりを深めているお寺の活動に参画することを通して、現代社会におけるお寺の可能性を体験的に学び、さらに実習生自身が調査や企画を実施することを通してお寺の可能性を引き出すことを目指した。

本プロジェクトの概要は以下の通りである。

【前期】前期の前半は、教員の企画による実習で、西方寺・本願寺・一念寺・覚明寺を訪問した。受講生は住職などのお話を伺ったり、お寺の活動に参加したりすることで、地域におけるお寺の役割や可能性について体験的、主体的に学んだ。また、西正寺住職の中平了悟氏に龍谷大学瀬田学舎にてご講演いただき、受講生は現代社会におけるお寺のあり方や可能性について広く深く学ぶことができた。

そして、前期の後半には、後期に受講生自身が企画や調査を実施する練習として、受講生がグループに分かれて学外実習の企画を立案し、実習先を訪問した。雲雷寺・円覚寺・善念寺・西正寺・法得寺の5箇寺を訪問し、多くの学びを得た。

毎週の学内実習の時間では、学外実習の事前・事後学習を実施するとともに、大谷栄一編『ともに生きる仏教——お寺の社会活動最前線』（ちくま新書、2019年）を講読しながら、お寺の社会活動の実際について学び、議論した。

【夏休み】オープンキャンパスでの活動報告で前期の学びをまとめて発表した。また、後期に実施する企画の案をグループに分かれて検討した。

【後期】夏休みの検討を踏まえて、問題関心別に4つのグループに分かれて、グループごとに実習を立案・実施した。①お寺のことを若者等にも知ってもらうことを目的にSNS等での情報発信を検討した広報班、②子どもを対象とする寺院の活動に関心をもって善念寺・明覚寺の活動に参画した善念寺班、③大人を対象に寺院で開催されるイベント等に関心を持ち、西方寺や京都の西陣地区の寺社で実習を計画した西方寺班、④お寺で音楽イベントなどを実施し、さまざまな人が訪れる場となっている雲雷寺の活動に関心をもって実習を計画した雲雷寺班、の4つである。各班が実習を通して、現代におけるお寺の可能性について考えることを目指した。

実習の成果をまとめる際には、②③④の班を1つのグループにして、さまざまな世代の人々とお寺がどのようにしてつながることが可能かを考える多世代班と、①の広報班に分かれて検討した。これら2グループが2025年1月10日の実習報告会の口頭発表・ポスター発表でそれぞれ活動内容を報告した。

また、学内実習の時間には、受講生の企画や調査（の準備）を実施するとともに、お寺に限らず、現代の日本社会において諸宗教がどのような意義や可能性をもつかを考えるため、堀江宗正責任編集『現代日本の宗教事情〈国内編Ⅰ〉（いま宗教に向きあう1）』（岩波書店、2018年）および西村明責任編集『隠される宗教、顕れる宗教〈国内編Ⅱ〉（いま宗教に向きあう2）』（岩波書店、2018年）の2冊を講読した。（古荘匡義）

（2）2024年度の取り組みの紹介

●前期の取り組み：

①教員企画

【西方寺】5月11日、西方寺で開催された「花地藏まつり」に受講生12名と共に参加させていただいた。受講生たちは駐車場警備と駄菓子屋の手伝い、スマートボールの担当者という役割をいただき、活躍した。教員も受講生の穴を埋める形でスタッフとして参加した。15時からの抽選会終了後は、会場の片付けも手伝い、副住職夫妻とスタッフとして参加されていた方に当日の感想を一人ひとりお伝えした後、3人からコメントもいただいた。



【本願寺・一念寺】日程の都合上、土日の2日間連続の現地実習となったが、5月12日には午前には本願寺、午後には本願寺門前町にある一念寺を訪問させていただいた。

午前は浄土真宗本願寺派「子ども・若者ご縁づくり推進室」畑中阿難氏より、ご講演をいただき、当室の活動理念とその概要についてお話を伺った。受講生からの質問にも答えていただき、お寺の活動、宗門の働きについての理解を深めた。畑中氏からは、ご自身のキャリア形成についてのお話もいただき、これからのキャリアを作っていく受講生たちにも示唆に富むお話を伺う機会となった。その後、国宝である書院をご案内いただいた。受講生たちは、お寺が当時の人びとのエンターテインメントとしての働きを果たしていたという気づきを得た。



午後、一念寺にて谷治暁雲住職にお話しいただいた。これまでのご活動、新撰組ゆかりの地域であり、それを生かしたまちづくりをしていること。事前に調べたご活動についての疑問について質問し、理解を深めた。そのあと門前町の街歩き案内を谷治氏よりいただき、本願寺の太鼓楼の前で解散した。

【覚明寺】5月25日には、覚明寺「みんなの笑顔食堂」に受講生8名と共に参加させていただいた。宇野哲哉住職からお話を伺ったあと、子どもたちと保護者が作成するレジンキーホルダーづくりを手伝い、その後、参加者のお子さん、保護者様とともに坊守（寺を守る役割を示す役職名。浄土真宗では住職の補佐を担っており、住職の配偶者が務めることが多い）の作ったカレーをいただいた。食後、子どもたちと本堂や境内で一緒に遊んだり、保護者やボランティア、坊守またお参り前のご住職から、少しお話を伺ったりすることができた。受講生たちは伸び伸びと過ごす子どもたちの姿が受講生たちにとって印象的だったようだ。



【中平了悟氏講演】5月31日は瀬田学舎にて西正寺住職の中平了悟氏より、西正寺の地域の方々との連携をもとにした多岐にわたるご活動とその背景にある理念を伺った。受講生たちは、中平氏からのお話は後期の活動のヒントにつながる点も多く、お寺の可能性について更なる理解を深めた。ご講演のなかで紹介された「お寺でのんびり過ごす日」の企画については、多くの受講生の関心を集め、学生企画で訪問することとなった。（猪瀬優理）

②学生企画

○西正寺

7月21日に兵庫県尼崎市の西正寺「お寺でのんびり過ごす日」に参加させていただいた。夏休みが近い日曜日だったため、小さいお子さんから小学生まで幅広い年齢の子どもを連れた親御さん、さらには近くでホームステイをしている外国の方々まで、多くの人々が集まっていた。このイベントの中心である流しそうめんには、子どもから大人までが楽しんで参加していたが、参加者が自由に過ごし、自分のペースで楽しむ姿が多く見られた。このようにリラックスして過ごせることが、参加者同士の交流をより深めることにつながっていたと思う。また、西正寺では今回のイベント以外にも「テラからはじまるこれからのハナシ」や「西正寺寄席」、「おてらのそうじ」などのイベントが定期的で開催されている。このような活動が地域交流をより活発にしており、地域住民は西正寺を気軽に訪れることができる身近な場所として認識していることが分かった。(櫻井莉子)



○円覚寺

滋賀県蒲生郡竜王町の円覚寺では、不登校の子どもや学校に行きづらさを感じる子どもたちのための居場所づくりとして、月に一度「あるますのお堂」という活動がおこなわれている。寺子屋も運営する菅原貴之住職と坊守、そしてボランティアの方々が、学校でもなく、家でもない「第三の居場所」を開いている。

「あるますのお堂」では、子どもたちが自由に過ごせる時間を大切にしており、絵を描いたり、遊んだり、静かに過ごしたりすることができる。勉強をすることも可能で、自分のペースで過ごせる場となっている。私たちが7月27日にお伺いした際には、ボランティアの方がボードゲームを持ち込んでくださり、子どもたちと一緒に楽しい時間を共有することができた。

お寺を居場所とすることについて、ご住職は「お寺は本来、必要とされる人の居場所である」と考えており、「あるますのお堂」もその役割を果たしているのではないだろうか。学校に行きづらい子どもたちにとって、家や学校以外に安心して過ごせる場所があることは大きな意味をもつだろう。自由に過ごせるお寺という存在は、彼らにとってさまざまな経験や思い出などをもち、今後も心の拠り所となるのではないだろうか。(山崎翔)

○善念寺

善念寺では7月25日に子ども会のお手伝いに参加させていただき、子どもたちの宿題を見守り、宿題が終わった後には皆でかき氷を楽しんだ。

参加している子どもたちはご住職の子どもの友達つながりで来ている子が多く、皆が顔見知りでもとても仲良く賑わっており、子どもたちの様子から地域のつながりを感じるこ

ができた。その中でも初めてこの子ども会に来たという子もいたが、初めて来た子も含めみんながお寺に馴染んでおり、私たち実習生も受け入れてくれる開かれたコミュニティになっていた。

また、子ども会の前に治田義章住職とじっくりとお話を伺うことができた。お寺の活動の維持に関する話や周辺地域とお寺のつながりに関する話など、活動を続けていくことの苦労や悩みについてお寺目線でお話を聞くことができた。今後私たち受講生がお寺の課題やその解決を見つけていくためのヒントを得る貴重な機会となった。(吉田真央)

○法得寺

7月21日には、大阪市東住吉区にある法得寺を訪問させていただいた。副住職の吉井空羅さんから、小さなお寺の現状や課題、お寺に求められているものやこれから実現していくべきこと、現在法得寺で実施されている活動などのさまざまな話を伺うことができた。

法得寺は、ペット墓「虹テラス」や「寺カフェ里里 satori」をはじめとした、先進的な活動にも積極的に取り組まれているお寺である。今後は、マルシェの開催や行政との連携も実現していきたいと話されていた。

実習の最後には「寺カフェ里里 satori」を利用させていただいた。老若男女問わず多くの方に利用されており、法得寺が地域の居場所となっているのだと強く感じた。(北野綺音)

○雲雷寺

大阪市中央区中寺に所在する日蓮宗雲雷寺では、地域活性化の一環として「お寺でJAZZ」「お寺でオペラ」の2種を軸に、多数のイベントを開催している。私は、5月18日の「お寺でオペラ」に参加した。

「お寺でJAZZ」「お寺でオペラ」はNPO法人「響・耀」と協力し、プロの演者が雲雷寺で演奏や演技を披露する大人気のイベントである。

7月14日には伊丹瑞廣住職と対面で話す機会ができ、そこではイベントを開催した理由、イベントを開催するにあたって重要なこと、仏教界における課題、今後の展望などたくさんの内容を伺うことができた。

雲雷寺では、「お寺でJAZZ」「お寺でオペラ」以外に、「寺ヨガ」を定期に開催している。雲雷寺のイベントに興味をもったのであれば、是非参加して欲しい。(清水絢翔)



雲雷寺山門 (雲雷寺提供)



雲雷寺本堂 (雲雷寺提供)

●後期の取り組み

○西方寺班〔西方寺（ヨガ教室）・てくてく西陣〕

滋賀県草津市にある西方寺が場所を提供する形で、ヨガのインストラクターによって定期的に開催されているヨガ教室がある。このヨガ教室に「大人をターゲットとしたお寺のイベント」を体験することを目的として、私たち受講生が参加した。1時間程度、ヨガを教えていただくイベントで、主婦さんたちが参加されている。このヨガ教室の良さは、普段訪れないお寺に行く機会になり、近所でヨガをすることができる、主婦さんたちの集まりの場となり地域が明るくなる、という点である。ヨガ教室への参加を通して、ヨガの面白さやお寺が身近な存在であると実感できた。そして、今までもっていた「お寺は近寄りにくい」という概念がなくなり、お寺をもっと人と人が出会う場所として活用することができると分かった。

京都市西陣地区の寺社が連携した「てくてく西陣」に参加した。これは、西陣エリアの寺社等を巡る「デジタルスタンプラリー」と、スタンプポイントの魅力を伝える「フォトコンテスト」で構成されている。地域活性化の取り組みとしておこなわれており、西陣地区の特産品の出店がある。西陣内で20箇所の寺社や地域の方が協力したイベントになっている。お寺にあるコードをスキャンしてスタンプを貯めていくことで賞品の抽選に応募することが可能で、子どもも参加したいと思える工夫がされている。私たち受講生は平日の10時00分から参加したため、拝観している人が少なくスムーズに回ることができたが、休日は多くの方が拝観されるそうである。10月～12月は紅葉がとても綺麗で寺社だけでなく自然も楽しめるイベントであった。「大人をターゲットにしたイベント」を体験するために「てくてく西陣」に参加したが、観光客の方にも目を向けたイベントだと知ることができた。お寺の歴史や魅力を地域の方だけでなく広く観光客に伝えるイベントとなっていた。西陣の伝統的な技術や文化、特産物、工芸品を知る機会があり地域をより知ることができて地域活性化につながるイベントであることが分かった。(村松奏汰)

○善念寺班〔善念寺・明覚寺〕

私たちの班は、後期のテーマとしてお寺と子どもに焦点を当て、お寺が子どもたちを対象にしているイベントにはどのようなものがあるか、またイベントにはどのような思いが込められているかについて調べた。私たちは、このテーマに沿って善念寺の「子ども会」、明覚寺の「日曜学校」に参加させていただいた。

活動内容として善念寺の「子ども会」では、焼き芋のイベントに参加し火起こしや枯葉集め、受付などを手伝いながら子どもたちと活動前のお勤めなどを体験した。また、明覚寺の「日曜学校」では、元々明覚寺で活動していたボランティアの方のレクリエーションのお手伝いをして、子どもたちと触れ合いながら朝のお勤めや仏教とはどのようなものかを一緒に学んだ。

後期の活動で学んだことや感じたこととして、善念寺の「子ども会」、明覚寺の「日曜学校」、どちらの寺院の活動もお勤めをすることを重要としており、子どもの頃からお寺や宗

教というものに触れられるようにしていた。理由として、どちらのお寺も「宗教的なものといえばマイナスなイメージを浮かべることが多いが、子どもの頃からお寺というものに触れ合うことでそのイメージをなくし、お寺というハードルを低くしたい」と仰っていた。子どもたちにお寺がどういうものかを知ってもらうことで、子どもたちが将来大人になった時に何かお寺が助けになる場合などにお寺に関わりやすくして、仏教の教えを長くつないでいきたい、というご住職の思いが伝わってきた。(松村漱亮)

○雲雷寺班〔雲雷寺（「お寺でオペラ」「お寺でJAZZ」）〕

後期では、お寺でイベントを企画することを目標にした。イベントを企画するにあたって、イベントに参加される年齢層や団体・スポンサーとどのように関わっているかを知るために、10月19日の「お寺でオペラ」と10月26日の「お寺でJAZZ」に参加した。

まず、イベントには演者のファンが多数雲雷寺に来てくださった。また、20歳未満の方が約3割観賞に来てくださり、多様な世代がイベントを楽しまれていることを実感した。

次に、イベントに協力しているスポンサーには雲雷寺の檀家の方がいらっしゃった。お寺やNPO法人だけでなく、檀家もイベントを盛り上げようとしていることが分かった。

「お寺でオペラ」「お寺でJAZZ」は、地域活性化だけでなく、幅広い年齢層がお寺へ訪れることも可能にしていると考えられる。(清水絢翔)



本堂前のキャンドル（清水撮影）



演奏の様子（雲雷寺提供）

○広報班

【Instagram開設】若い世代をターゲットにお寺の魅力を伝えるべく、Instagramを開設した。投稿内容や投稿頻度、投稿する画像の作成に至るまで受講生自身でおこなった。2025年2月5日現在で4つの記事を作成し投稿をすることができた。投稿した記事の内容は、「お寺に関する簡単な知識」「龍谷大学の入学式、仏教の授業」「社会共生実習について」などといったものとなっている。加えて、中国語に翻訳をした記事も作成し投稿をおこなった。

また、Instagramのリール機能を活用し、ショート動画を作成し投稿をした。投稿を



@OTERANOKANOUSEI_2024

龍谷大学お寺PJ Instagramアカウント

したショート動画は、京都駅から一念寺までの経路を 2 分程度にまとめた動画となっている。

2月5日現在で34人のフォロワーを獲得することができ、リール動画は71回再生された。引き続き活動をおこなうことでさらなる結果を得ることができると考えており、今後も活動をおこなっていく予定である。(北野綺音)

【インタビュー記事作成】私たちのグループではお寺の広報活動をおこなう一環で、一念寺住職の谷治暁雲先生（以下谷治先生）にインタビューをおこなった。



Instagramに掲載する記事は手軽で短いものを心掛けていたが、もっとお寺や住職について詳しく知りたい人を対象に、文章量が多くてもネットで読みやすいインタビュー記事を作成することにした。

一念寺は法要だけでなく、コンスタントにさまざまな活動をお寺でおこなっているのが特徴のお寺だと認識していた。そのため、インタビューの質問ではお寺でおこなっている活動、今後やってみたい活動をお聞きし、インタビュー記事にしたいと考えた。そのことにより、お寺の住職である谷治先生の考え方を知るきっかけにすることを目的とした。

一念寺ではピラティスやヨガといった教室の他にも、人気の子ども食堂や学童保育のような小学生の放課後の遊び場の提供、犬猫譲渡会など、幅広くイベントがおこなわれているようだ。それらの活動の多くは、実は他の団体が主催で企画していて、お寺を会場として提供していると話されていた。その理由は、イベントの継続性を大切にしているからである。お寺を会場として提供し、イベント開催のバックアップに回することで、もし自分が倒れても活動が続けられるようにしたいようだ。お寺が主催で地域に向けたイベントをおこなっているところはあるが、他の団体が主催で開催することが多いのは珍しく、一念寺ならではの特徴だと考えた。

谷治先生は浄土真宗の住職ではあるが、過去の経験から宗派を超えたつながりを作ることが大切だと考えているようだ。しかし、各宗派の考えや儀礼をしっかり守るため、他宗派と関わることに反対する人もいるようだ。宗派を超えたつながりはお寺の新たな可能性を秘めていそうだが、なかなか実現は難しそうな印象を受けた。

お寺で何か活動をしたり、イベントをしようとするとしても反対があるようだ。それ



note「お坊さんにインタビューしてみた～京都・一念寺～」記事

でも、自分がやりたいと思ったことはやる気持ちを大切にしていると話されていた。

今回、一念寺住職である谷治先生にインタビューをおこなって、他の団体と協力しながら積極的に課題に取り組むお寺のあり方を知ることができた。このようにお寺の特徴的な取り組みや活動を広報することで、お寺のひとつのかたちを多くの人に知ってもらうきっかけになるのではないかと考えている。(横江寧音)

【実習活動の広報】また、11月には京都の清浄華院さんでおこなわれるイベントにボランティアとして参加させていただいた。清浄華院さんのイベントでは、お寺自体が京都の繁華街近くに位置しているため、地元に住む方や大学生、外国人など老若男女さまざまな方が来訪していた。特に外国人の方とは英語での交流が必要となり、清浄華院さんのように地域によってはお寺にも語学の対応が求められるため、学生が力になれる場面があるのではないかと考えた。さらに清浄華院さんのイベント開催についてはSNSを通じて知り、連絡させていただいたこともあり、SNS活動についてのお話も聞くことができた。このイベントではSNSと連動したキャンペーンの実施や、SNSを通じたフリマ出店のお誘い、さらには広報の予算増加など、広報活動に重きを置いた取り組みが功を奏して大盛況のイベントとなっていたように感じた。

そして参加の際には、私たちの実習活動とSNS活動の宣伝を目的としたチラシ配りを実施した。配布したチラシは、グループでデザインを考案したもので、完成するまでかなりの検討を要した。以降他のお寺の訪問の際に、完成したものをお寺に置いていただくことになり、私たちの広報活動によりお寺とつながることができたことを実際に感じられた。(吉田真央)



(3) 2024年度の取り組みの成果と課題

①多世代班

西方寺班、善念寺班、雲雷寺班の活動を総合して、現代社会において、お寺は「多くの世代が集い交流する場」として成り立っていることを理解した。伝統的な側面を大切にしつつ、幅広い世代が親しみを感じる場所となるために、子ども食堂や地域活性化の企画など、お寺でのイベントや取り組みがおこなわれていた。お寺が多くの人に開かれた場所となるように、伝統を活かした行事だけでなく、JAZZのようなお寺と直接関係がないように感じられ

るイベントもおこなっている。お寺は宗教的な側面も大切にしつつ、宗教施設の枠にとられない心の癒しや学び、地域交流を生み出す現代的な空間へと移り変わっていることを感じられた。

お寺の課題としては、お寺が地域社会に開かれた場となる一方で、伝統的な役割が薄れてしまう可能性が挙げられる。どのように伝統を守りながら、新しい取り組みを進めるのがポイントとなるだろう。

加えて、イベントや活動を続けるためのスタッフをどのように確保するのも課題となるだろう。檀家さんの高齢化・減少でお手伝いの人手不足が露わとなっている。善念寺さんは、現状の活動以上には手が広げられない状況だとおっしゃっていた。

受講生の課題は、お寺がイベントを開催する中で何を大切・重要にしているのかを理解することであると考えます。受講生である私たち大学生は、お寺の課題であるイベントのスタッフ確保の解決につながる存在であるだろう。しかし、むやみやたらにイベントへ参加することは間違っているのではと感じてしまう。お寺ごとに重んじているものが異なるし、根本的な理解が不足した活動は失礼な行為であるだろう。お寺が尊重するものを理解した上で参加することで、スタッフ確保の手助けとなるだろうと考える。(湯田直人)

②広報班

SNS 活動が活発なお寺は関心を集めやすく、来訪者数増加やお寺全体の活性化につながっていることから、お寺に興味をもってもらうためには多様な広報活動が重要であることが分かった。私たち受講生としては、若い世代がお寺のことを知ることのできる機会や手段を増やし、お寺を訪れやすくするために、引き続き SNS を中心とするさまざまな広報活動に取り組む必要があると考えている。(北野綺音)

(4) 受講生の感想

①多世代班

社会学科：櫻井莉子

1. 自分が後期に携わった活動の概要

前期の活動では、善念寺さんや西方寺さんの子ども会に学生スタッフとして参加させて頂き、住職さんから「子ども会を開いてもやはり年々人が来なくなっている。今は、子どもたちの知り合いが来てくれることで人数は維持している」という現状を聞くことができた。この経験から「少子高齢化により、お寺に集まる人々が減少している」という課題を設定し、より幅広い世代の方がお寺の活動に参加する実態を調査する目的を定め、後期の活動では、対象者を子供から大人に広げ、学生スタッフという立場だけでなく、参加者のひとりとして3つのお寺で活動をおこなった。

2. 活動の成果の概要

1つ目が、お母さんにとって居場所の一つになって欲しいという目的で始められ、西方寺さんの本堂をお借りして行った「お寺でヨガ」である。実際にヨガ教室に参加させて頂いたことで、参加されたお母さん方に直接お話を伺うことができ、「お寺の敷居が高い印象は変わっていないものの、こういった活動があることでお寺に行きやすくなった」と話されていた。大人の方の、お寺に対する考え方を実際に聞くことができた。

2つ目は、西陣地区の地域に賑わいがなくなり、歴史的な街並み景観が失われつつあるという課題を対処する為に開催された「てくてく西陣」と連携している5つのお寺を訪問した。参加者の視点からみたことで、この活動において、それぞれのお寺が人を集めるためのイベントをおこなうのではなく、観光スポットとして存在感を高め、文化の継承という役割を維持していることに気づくことができた。

3つ目が、善念寺さんのこども会に学生スタッフという役割で参加し、普段関わることがない子どもたちと繋がることができた。そして、前期で築いたご縁が見事に実を結び、新たに地域の方々とも交流ができたことが大きな成果であった。

3. 活動のなかで直面した困難や葛藤、そしてそれらをどのように解決したか

前期で善念寺さん・西正寺さん・西方寺さんを訪問した際、私は学生スタッフとして子どもたちと遊び、イベントのブースの手伝いをするのが主な役割だった。その為、後期に学生が主体となって活動することに対して不安を感じ、「私たち学生が実際にこれらの活動に実習として参加することで、お寺側にどんなメリットがあるのか」という葛藤も活動中に抱えた。さらに、対象者を大人まで広げた為、「お寺で合コン」や「座談会」といった活動が多くみられ、学生が参加することが難しい状況になった。しかし、こうした葛藤を解決する鍵となったのが「ご縁」であった。これまでの活動でお話を伺った住職さんや講師の方々から「ご縁」という繋がりを大切にしていることを学んだ。この経験を通じて、「ご縁」を活かし、前期で訪問したお寺の活動に再び参加することで後期の活動に進むことができた。お寺が大切にしているご縁を私たち学生が繋ぐことで、活動の意義が深まり、お寺の活動における学生としての役割を自覚し、人との繋がりの重要性を改めて認識して、後期の活動に取り組むことができた。

4. 活動を通して得た自身の変化や成長

今までは、先生方が決めたお寺に行ってお話を聴き、スタッフとして参加するだけの受け身な状態であった。しかし、自分たちで1からお寺を探し、協力を得られるようアポイントを取り実習に行く経験を通して、私はこの社会共生実習で、目的を掲げて実態を調査する為に大学外のコミュニティに参加するという「行動力」を成長させることができたと感じている。最初は敷居の高さを感じていたお寺に行くこと自体に少し抵抗があったが、お寺が地域にとって一つの居場所になっていることを強く実感したことで、お寺の在り

方に対する考え方にも変化を得ることができた。

5. 活動したことによって実習先や地域、他者にもたらした変化や影響

実習先や地域、そして他者に対して私がおもたらした変化や影響は「人材」と「繋がり」にある。特に善念寺さんの活動では、前期と後期の両方にスタッフとして参加し、住職さんから「助かりました」というお言葉をいただいた。この事から私たち学生がお寺を大きく変えることはできなくても、お寺の活動に関わることで「学生がお寺に興味を持っている」という事実を示すことができたと思う。また、ひとりの支援者としてお寺と関わり続けることができるという繋がりを他者にもたやすことができたと感じている。

6. 活動を通して考えた現代社会におけるお寺の可能性

活動を始める前は、特別な理由もなく、子供会が開催されていてもお寺に行くことが無かった。しかし、1年間を通して、お寺が地域社会で果たす役割の重要性を実感した。お寺は日常的に人が集まり、イベントを開催すれば子どもから大人まで幅広い世代が参加する。また、お寺は地域活性化や復興支援活動にも力を入れ、地域社会に大きく貢献している。

お寺は宗教的な役割を持ちながらも、新しい活動を提供することで、地域住民とお寺が「繋がる」ことが可能であると分かった。現代社会において、お寺はある人にとっては癒しの場であり、別の人にとっては新たな出会いの場となっている。お寺は多様な役割を果たしている。お寺が地域の拠点となることで、地域の人々は「繋がり」を持ち、互いに支え合う関係を築くことができる。これからもお寺が活動を続けていくことで、地域住民が紡ぐ「ご縁」がさらに広がり、地域コミュニティをより活性化できる可能性があると考えた。お寺とのご縁を通じて、私たち学生も地域社会の一員としての意識を持ち、ともに支え合う関係を築いていくことが重要だと感じた。

② 広報班

現代福祉学科：吉田真央

1. 自分が後期に携わった活動の概要

後期ではお寺の魅力について若い世代に伝える SNS または広報活動に取り組んだ。この活動は、お寺の活動や様子を知れる媒体の少なさと、お寺の活動に対する若い世代の担い手不足といった課題を前期の活動中に感じたことから始まった。特に若い世代の少なさは、お寺の来訪者の高齢化が影響しており、お寺の今後の継続性にも関わってくる。また、若い世代がお寺に足を運びにくい要因のひとつとして、お寺という場所の敷居が高いことが考えられる。幼い頃からお寺と関わりを持っていれば行きやすい場所となるが、普段何をしている場所なのか分からない場所に行くのはかなりハードルの高いものである。しかしお寺という場所が今様々な社会貢献活動をしていて、新たな居場所やコミュニ

ティとして機能していることは、若者にとっても、ご近所付き合いなどの地域住民のつながりが薄れていく今の社会にとってもより一層知られていくべきである。

こうした課題を解決するために、お寺の広報活動を学生目線でおこない、若い世代中心にお寺の活動に興味を持ってもらうことを目的として活動に取り組んだ。活動内容は、学生のみでインスタグラムのアカウントを立ち上げ、実習活動の紹介や訪問したお寺の紹介を掲載し、訪問先のお寺に関するショート動画や住職へのインタビュー記事の作成をおこなった。また、ボランティアとして参加したお寺のイベントにて、自身の SNS 宣伝を目的としてチラシを 1 から作成し配布した。私はショート動画とインタビュー記事を作成し、主に掲載するもののデザイン考案や、話し合いの場で意見や仕事を回していくリーダー的役割を担った。

2. 活動の成果の概要

私が取り組んだ SNS または広報活動での成果は、お寺の広報活動の幅を広げることができた点である。

後期からインスタグラムのアカウントを開設し、各地域のお寺のインスタグラムアカウントと繋がることができた。そこで私はいくつかのお寺の SNS 活動を拝見し、どのような形態が SNS において効果的であるかを調査する役割を担った。人気なお寺のアカウントの特徴として、SNS において需要が高い面を見せていくスタイルを確立している点があると感じた。具体的には、のんびりとしたお寺の日常の様子や、核心をつくような言葉が書かれたお寺の掲示板などが挙げられる。インスタグラムは特に学生と同じ世代の 10 代から 20 代の世代が多く、共に活動する学生の中でも SNS でどのように自身と同じ世代へ伝えていくかは非常に吟味した点であり、作成したショート動画やインタビュー記事はお寺の広報活動において新たに需要が芽生えると思い考案した。

このように今まであまり見られなかった、学生目線でお寺の広報活動に取り組むことでお寺の魅力をどのように伝えていくかという幅を広げることができたという点が、私の活動の成果だと考える。

3. 活動のなかで直面した困難や葛藤、そしてそれらをどのように解決したか

まず広報活動取り組みの中では、デザインの試行錯誤が長く続き、「どうすれば簡潔に伝わるか」「何を目的として広報をするのか」という事を常に考えていた。作ってみたものの思っているより反応がなかったり、作りたいと思うものに届く完成品でなかったり、自身の中で期待していたものが叶うことは少なかったように思う。その度に SNS で掲載されている、他の学生団体による鮮明な広報活動の記事等を見ると、何が一体違うのか試行錯誤する日々が続いた。

そんな時、同じく広報活動を共にしていたグループの学生に、その過剰だったかもしれない自身の期待について悩んでいることを軽く打ち明けると、「自分も思っていた」とい

う言葉とともに今まで自分には無かったアイデアを軒並み出してくれた。私は正直「なぜそんな素敵なアイデアを隠していたのだ」と思ったが、それはグループで活動をしているのに自分だけで悩みを抱えて、何か引っかかりを感じていたのにも関わらず、そのまま突っ切ろうとしていた私自身に難があったと気付いた。自身の中でも残り少ない実習の日数に焦りを感じていて、悩みを蔑ろにしておいた方が周りのためだと思っていた節があり、助けてくれる人がこんなにも近くにいる事を忘れていた自分に反省した。

そこからデザイン案に対して、グループ内で積極的に意見を出せる機会を設けるようになり、実習の授業内にも加えて週に一度学校で各自作ったデザイン案を共有することにした。その都度、「私達はこんな広報を作りたい」という希望を、言葉でも参考になるSNSの投稿でもどんな形でもよいので、互いに提案できるようにした。その中でも遠慮してしまう学生もいたため、些細なものでもなるべく意見や希望を聞き出せるように、学校の会話だけでなくグループチャットでも意見を募れるよう心掛けた。そうした過程を踏んだことで、訪問先のお寺で配布することになったチラシのデザインも何度も訂正を重ねて完成し、皆の期待以上の完成度で仕上げることができた。

4. 活動を通して得た自身の変化や成長

私はこの社会共生実習を受ける前は、人前で話すことがとにかく苦手であり、何を話すにも声が震えてしまう程だった。実習を受け始めてからも、前期で実習の受け入れ先の方とやり取りをさせて頂いた際には、他の学生とのコミュニケーション能力に差を感じて億劫になる日もあった。

しかし、後期にもなり場数を踏み続けていくと、慣れもあってか電話のやり取りにも自信がつき、知らない環境にも恐れず飛び込んで自然と馴染む自分がいた。自分自身でも明らか「自分は変わった」と思えるほど、社会への一歩を踏み出すことができ、さらに「自分は変わった」という体験があることで、今後長期的な挑戦にも自信をもって迷わず踏み出せるだろう。

これに関して、知らない環境に踏み出す機会をこの実習で数多く得られ、今まで知らなかった社会のコミュニティを沢山目にして入っていくことができた。私は特に、お寺の社会貢献活動、ましてやボランティアの活動に参加したことが無かったため、お寺とボランティアで作っていくお祭りイベントといった空気感は、私にとってかなり新鮮だったことを覚えている。寺子屋やお寺の子ども食堂など親子が集まるコミュニティや、全く知らない地域のイベントといった、大学やアルバイト、SNS などにはない自分の知らないコミュニティがまだまだ沢山あることを知ることができ、社会は非常に多くの視点とコミュニティから築き上げられていることを感じた。

そこでは自分と関わる事のない職種の方や、自分が知らなかった新たな楽しみ、新たな居場所と出会うことができ、そこへ足を運ぶ行動力が社会に出た後の成長にも重要になる力だと学んだ。ただ自分がひたすらまっすぐ人生を歩むだけではなく、自分と全く関係

のなさそうなコミュニティでも実際に足を運ぶと、新たな視点と考え方が得られ社会の多様な人間を認めることができる。私はこれらのような変化や成長を、活動を通じて得る事ができた。

5. 活動したことによって実習先や地域、他者にもたらした変化や影響

私のグループで取り組んだ SNS または広報活動では、日本の各地域のお寺の SNS アカウントと繋がることができ、「学生がお寺に関わる活動をしている」と知ってもらえたことが、もたらした変化だと考える。前期に訪問したお寺の住職の方とお話した際に「SNS 慣れしていない住職さんも多い」と仰っていたが、学生にもお寺に興味を持って広報活動を手伝える人がいるということをお寺の方に知ってもらえたことは、広報活動の成果にもなり得る、私たちがもたらせた影響である。

6. 活動を通して考えた現代社会におけるお寺の可能性

私が考える現代社会におけるお寺の可能性は、地域社会において誰もが居場所になれる新たな社会資源のひとつという可能性である。

前期と後期共に各地域のお寺に訪問したが、それぞれ多様な特性を持ったコミュニティであった。子どもを中心に活動をしているお寺や地域全体の中心となるお寺、高齢者の健康づくり活動に取り組むお寺など、周辺地域の特性と住職のやりたい活動が合わさった取り組みをしているお寺が多いという印象があった。住職それぞれで取り組み内容や度合い、興味も異なるため、多様な形態でありながらお寺同士でも協働する機会もあるというお話も伺った。また、実習を何度も重ねる度に感じたお寺で過ごすことの特別感は、今までの思い出とは代えがたい穏やかな思い出となった。日本の伝統的文化を感じるお寺の建築が作り出す空間や社会生活とは異なり時間を感じさせない穏やかな一日など、お寺にしかない特別な環境だと思った。この特別な環境が、現代社会で疲弊した人々を癒す場にもなると私は考える。

こうしたことを活動によって感じてきたが、今日の現代社会の課題として考えられることは、自治体の衰退やご近所付き合いの減少などといった地域住民のつながりが薄れていることである。私はその地域のつながりを再構築できる場のひとつに、地域のお寺があるのではないかと考える。

地域住民に開かれた特別感あるお寺に集まり、いつもと違った 1 日を共に過ごし時間を共有することは、新たなコミュニティができる始まりにもなり得る。普段話すことのない世代や職種の方や普段会うことのある関係の方も含め、お寺という穏やかな場所で出会うことで、学校や職場といった社会生活では芽生えない会話や考えが生まれ、互いに人生が豊かになる繋がりができる場または互いのすこし特別な居場所になるだろう。

そのため、私が考える現代社会におけるお寺の可能性とは、普段生活する社会とは少し異なる穏やかな環境であり、自分と同じ又は異なる境遇の者が集まることでしか生まれ

ない繋がりができる、地域社会に必要不可欠なコミュニティの場のひとつとなる可能性だと考える。

(5) 2024 年度活動報告会の発表ポスター

ポスター①：多世代班

お寺の可能性を広げよう

～多くの人に寄り添うお寺であるために～

櫻井 清水 松村 村松 山崎 湯田

現代社会においてお寺は地域社会との繋がりを深める場として注目されています。伝統的な側面を大切にしつつ、幅広い世代が親しみを感じる場所としてこども食堂や地域活性化の企画、お寺イベントなどの取り組みを行っています。今回実習で行った「多くの人が集い交流する場」としての新しい役割と地域社会への貢献が期待されるお寺の活動を紹介します！

子どもと地域のつながり

こども食堂in善念寺

子どもやその親のコミュニティ形成を促進し、孤立しがちな現代での交流の場として活用されている。地域一体で子どもを育てる、良い街づくりにも関連しているように感じた。



寺社を活用した地域活性化

てくてく西陣in西陣地区

地域の観光資源として寺社を活用し、西陣地区の特産物や体験を提供することで地域活性化を図る。そして、スタンプラリーを通じて寺社の歴史や伝統を紹介し、寺社の魅力を広く伝えることに繋がる。



▲ 妙顕寺

お寺に集まる幅広い世代

お寺でJAZZin雲雷寺

プロの演者がお寺で演奏！
高校生・大学生・ファミリー層・高齢者など、幅広い世代が鑑賞しに来て下さった！！
地域活性化として始まったこのイベントは、外出機会の増加にも貢献した！！



結論

お寺は多くの人に開かれるように、伝統を活かした行動をするだけでなく、JAZZのようなお寺と直接関係がないように感じられるイベントも行っている。できるだけ多くの人に情報が届くように、SNSに力を入れたり、地域と連携し、試行錯誤している。
お寺は宗教施設の枠組みを超え、心の癒しや学び、地域交流が見られ、現代的な空間へと移り変わっていることを感じられた。

お寺の可能性を引き出そう「広報班」

概要

吉田・横江・北野・陸

お寺に対して若い世代に興味を持ってもらうことを目的とし、お寺関連の記事制作やチラシ配りなど広報活動に取り組んだ。活動を通してSNSの広報をきっかけにお寺を訪れた人が増えていることを知り、継続的なお寺の広報活動は今後のお寺のコミュニティ活性化に強く関わってくると考えた。

～課題・きっかけ～

- ・お寺への来訪者が減少・高齢化
 - ・お寺のSNS活動は少なく情報が得にくいと感じた
- SNS中心のお寺の広報活動を実施。若者にもっとお寺について興味を持ってもらおう！



京都・清浄華院

インスタグラム活動

目的：お寺の魅力を学生目線で伝え、
手軽にお寺について知ってもらう
対象：若い世代を中心

SNSが活発なお寺は
雰囲気伝わりやすく
行ってみたくなる

↓ + α

チラシ配り

11月清浄華院さんのイベントにて
目的：SNS活動と実習活動の宣伝
対象：イベント来訪者・お寺関係者

お寺とSNSでの交流を
通じてP1/P2出店して
いる方が多かったです！

「SNSの重要性を
受けて広報の予算
を増やした」

もっと手軽に
伝えたい！

もっと深く
知ってほしい！

「イベント主催者の
SNSを通して
お寺に来てくれる」

short動画撮影

SNSに掲載する動画を制作
目的：お寺についてもっと手軽に
知ってもらうため
対象：若者・全世代

お坊さんにインタビューしてみた

一念寺住職さんのインタビュー記事をnoteに掲載
目的：普段関わりのないお坊さんを
身近に感じてもらうために
対象：若者・全世代



インタビュー中の様子

～結果～

- ・さらなる継続的な広報活動が大切
- ・情報を求める人に合わせた形態で広報をする必要がある
- ・SNSを通じたお寺のコミュニティが形成されている

結論

お寺へ興味を持ってもらうためにSNSを活用した広報の活動は、
お寺のコミュニティを維持・活性化するために重要なものである。

いくつになっても、出かけられる！

～高齢者を元気にする介護ツアー企画～

担当教員：高松智画

(1) 取り組みの趣旨・目的

介護が必要な高齢者を対象とする介護ツアーに関するプランニングの基礎的な学習をするとともに、高齢者へのインタビューから、どのようなツアー企画にするかを検討していく。そして、下見やプレゼンテーションでのフィードバックを重ねて、企画内容を練り上げていく。

このような活動を通じて、本プロジェクトは、どのような配慮や介助があれば、介護が必要な高齢者の「出かける」ことを保障できるのかを考えるとともに、「出かける」ことを妨げている問題・課題は何か検討すること、さらには、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を身につけることを目的として開講する。

(2) 2024年度の取り組み紹介

① ツアーの意義やプランニングの方法に関する学習

まず、「安全・安心かつ魅力ある観光を高齢者や障害者に提示し積極的に外出する意欲を持って頂くことで生活の質を向上させる」ことを目的とし、バリアフリー調査・評価、介護旅行の企画・運営等をおこなっている、「株式会社どこでも介護」の大西氏から、介護旅行の事例や参加者の声などをあげながら、高齢者にとって「出かける」ことの意義や、どのようなプランを作成すればよいかなどについて講義を受けた。

そして、昨年度の実習で作成したツアー企画書、参加者募集のフライヤー、ツアー紹介動画の閲覧をしたうえで、受講生一人ひとりがどのようなツアーにしたいかについて話し合いをおこなった。また、旅行会社などが販売している高齢者向けツアーに関する情報収集もおこなった。

② 高齢者へのインタビュー

ツアーの対象となる高齢者とコミュニケーションが図れるようになること、普段の生活の中での困りごとや要望などを聞き取ることで、高齢者への理解を深めること、旅行や外出への要望について聞き取ることを目的として、京都市内の通所デイケア施設利用者と津都市内在住の4名の高齢者を対象にインタビューをおこなった。

その後、インタビュー内容を全員で共有し、ツアーコンセプト、対象、行先や内容について意見交換をおこなった。



③ ツアーの企画とプレゼンテーション

ここまでの学習と実習をふまえて、受講生それぞれのアイデアから 3 つのグループ分けをおこなった。そして、グループごとにツアープランのコンセプトを考え、下見をおこない、ツアー企画書を作成して持ち寄り、プレゼンテーションするという実習を 2 回おこなった。

各グループが提案したプランは次の通りである。1 つ目は、琵琶湖のミシガンクルーズとランチを楽しむ「優雅な休日を～琵琶湖クルーズツアー!」、2 つ目は、奈良公園散策と足湯、陶芸体験の「癒しの奈良散策～湯けむりと創作のひととき～」、3 つ目は、京都市動物園散策と苔玉づくり体験の「動物とのふれあいと創造でつながる旅」である。

各プランのプレゼンテーションをおこない、質疑応答や講師からのコメントを踏まえて実施するプランを決定した（企画書は以下のとおり）。

『動物とのふれあいと創造でつながる旅』

◎ツアーコンセプト

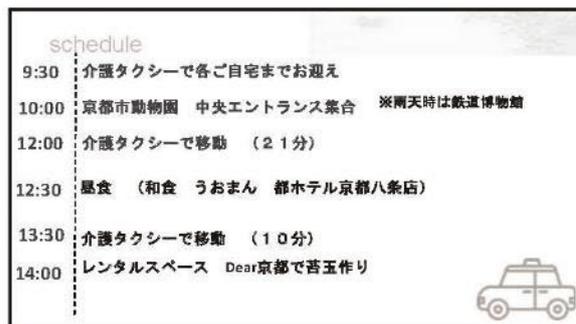
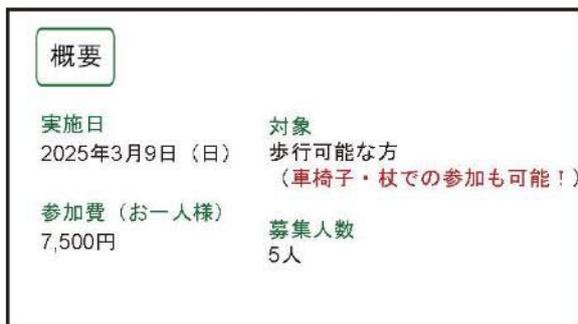
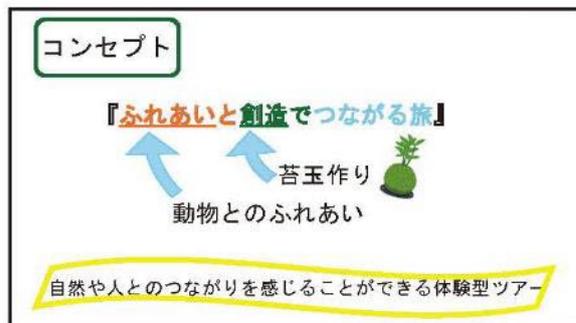
動物園での楽しい思い出と、苔玉作りで手作りの癒しアイテムを持ち帰れる体験を通じて自然や人とのつながりを感じることができる体験型ツアー

◎実施日：2025 年 3 月 9 日

◎タイムスケジュール

- 9:30 参加者の自宅から介護タクシーで送迎
- 10:00 京都市動物園 中央エントランス集合→園内散策
- 12:00 介護タクシーで移動
- 12:30 昼食(和食 うおまん 都ホテル 京都八条店)
- 13:30 介護タクシーにて移動
- 14:00 龍谷大学大宮学舎にて苔玉作り体験
お茶とお菓子を食べながらゆっくりお話ししながら作業
- 16:00 体験終了、各自宅まで送迎

・プレゼンテーション資料



- ・車いすのまま入れる施設や、目線を合わせた展示がされている。
- ・道が広く、平ら。
- ・多目的トイレ6カ所設置。

→バリアフリーが充実◎





鉄道博物館（雨天時）








広々とした館内と迫力満点鉄道模型!!

12:30 **昼食**(和食 うおまん 都ホテル京都八条店)





豆乳汁の奥入草履と天婦羅刺身 <https://www.cfsjapan.com>

豆乳汁の奥入豆腐と創作寿司

割烹・会席の職人が作る本格和食の味を、気軽に楽しみいただける基ならではの御膳スタイル

14:00 **花工房 苔玉作り体験**




https://www.homes.co.jp/cont/press/reform/reform_00403

<https://www.hanakobo.co.jp>

④ ツアー実施にむけた現在の活動

2月中旬に連携先である通所デイケア施設で参加呼びかけの時間を設けてもらい、5回プレゼンテーションをおこなった。また、学内インタビューの参加者への呼びかけをおこなった。その結果、通所デイケアから2名、学内インタビュー参加者から2名の応募があった。

2月下旬に、参加申し込み者には移動や食事、トイレの使用などにおいてどのような配慮や介助が必要であるかを詳しく知るために、個別の面談を実施した。また、当日までの準備のための役割分担やツアースケジュール確認のための打ち合わせや実習や車いす操作の練習をおこなった。

今後は、それに基づいてフェイスシートを作成して全員で情報共有を図り、参加者一人ひとりに適した介助ができるよう確認をしていくとともに、安全に楽しんでもらうためには、どのような準備、実施体制、役割分担が必要かを詳細に詰めていき、ツアー当日が迎えられるよう準備を進めている。

(3) 2024年度現段階での取り組みの成果と課題

プラン作成に先立っておこなった高齢者へのインタビューや学習をふまえながら、何度も企画書を修正した過程から、他者の意見を尊重しつつ自らの意見を主張すること、意見をまとめて形にしていくことなど、多くの学びを得たのではないかと考える。

そして、指導教員の指示を仰ぐのではなく、まずは自分たちで考え、意見を出し合って話し合い、みなが納得できる形で決めていくということを大切にして取り組んできた。

さらには、大学生だからこそ企画できるツアーとは何かを考え、具体的な形にしていくことには戸惑うことや悩むこともあったと思われるが、その楽しさを感じることができたのではないかと考える。

ツアー実施までに参加者との面談、実施直前の打ち合わせ、さらには、「どこでも介護」大西氏、橋本氏からの指導や当日の支援に加えて、通所デイケア施設の運営母体である病院医師による事前の診察やツアー当日の緊急対応支援、通所デイケア施設からの参加者家族への説明、通所デイケア施設職員 のツアー同行といった、ツアー実施のための体制を整えていく予定である。

こうしたことから、ツアー中にどんなトラブル・緊急事態が発生するかを想定し、それらを回避するにはどうすればよいかということを体験的に学ぶことが今後の課題である。そして、参加してよかった、また行きたいと思ってもらえるようなツアーを無事に終えることが、最終的な本プロジェクトの目標である。

(4) ツアー当日 (社会共生実習 HP より一部抜粋)

介護ツアー「動物とのふれあいと創造でつながる旅」を実施しました

社会学部『社会共生実習 (いくつになっても、出かけられる！～高齢者を元気にする介護

ツアー企画～』(担当教員：現代福祉学科 准教授 高松智画)では、介護が必要な高齢者に楽しんでもらえる日帰りツアーの企画から実施までを目標としており、これまでに高齢者への聴き取りなどを通じて、交通、生活環境、日常生活などで感じる高齢者ならではの「困りごと」について考察し、それらを踏まえて、どういった内容であれば「困りごと」を忘れて楽しんでいただくことができるか、試行錯誤してきました。

本プロジェクトの受講生たちは、ツアーを企画するにあたり、現地に何度も足を運んでバリアフリーの状況の把握やトイレの設置場所と広さの確認など、介護・介助に必要な情報を集約し、当日までに役割分担やツアースケジュール確認のための打ち合わせ、車いす操作の練習をおこないました。

また、参加希望者には事前面談をおこない、移動や食事、トイレの使用などにおいてどのような配慮や介助が必要であるかなどを確認し、不安がないよう努めました。

そうした準備を経て、このたび、動物園での楽しい思い出と、苔玉作りで手作りの癒しアイテムを持ち帰れる体験を通じて自然や人とのつながりを感じることができる体験型介護ツアー「動物とのふれあいと創造でつながる旅」を 3/9(月)に実施する運びとなりました。当日、まずは京都市動物園で集合しました。

1名の方が急なご都合変更のため、お昼からの参加となることがわかったり、学習目的のために入園には費用がかからないことがわかり、急遽受付で申請したりと、ツアー直後から計画変更を余儀なくされる場面がありましたが、余裕をもったスケジュールリングをしていたため、事なきを得ました。

京都市動物園では、歩行器を利用させていただいたり、頃合いで車椅子に乗っていただいたりして、参加者の方おひとりずつのペースに合わせてゆっくり移動しました。散策している中で「爬虫類は興味ないのよ～！」などといったお話が出た際には柔軟に対応し、各々に合わせた動線で動物を見て回りました。



高齢者のペースに合わせて園内を巡ります。



大きなカバの前でダブルピース！

最後に出口で集合写真を撮影したのち、介護タクシーを利用して昼食会場まで移動しました。



みんなで記念撮影



介護タクシーでもきちんと介助します

昼食会場では、参加者の方々と同じメニューをいただき、談笑しました。参加者の方々と安全にサポートする任務を半分終えて、受講生らもホッと一息ついた様子でした。



昼食メニュー！とても美味しそうです



一緒に昼食を食べてホッと一息

食事を済ませると、次の工程となる苔玉作り体験の会場へ移動しました。

ここでは「株式会社 花工房」の講師を会場に招いて、京都の伝統工芸・京組み紐にみたてた飾り紐を巻きあげ、「てまり」のように仕上げた「生命花手毬」作りを参加者の方々に体験いただきました。



作り方を教えてもらって…



土を綺麗に整えて…



受講生も一緒に協力して…



上手にできました！

受講生からも手伝って、世界にひとつだけの思い出づくりを楽しんでいただきました。
後日、受講生らはツアーの振り返りと参加された皆さまへの記念品作りのため、集まりました。

記念品には受講生から参加者の方々への想いが込められました。



たくさんの写真に思い出がいっぱいです



どんなものにするか相談中…



丁寧に作業します



想いをこめて仕上げます

本プロジェクトは、担当教員の退職にともない、今年度が最後となりました。今回も参加者の皆さまが無事に過ごされ、楽しんでいただくことができ、当初の目標を達成することができました。この日のことが参加者の皆さまや受講生の今後に良い影響を及ぼすことを切に願っています。

(5) 受講生の感想

社会学科：児玉和沙

コミュニティマネジメント学科：鈴木夏緒

現代福祉学科：芦田稔里

現代福祉学科：野口大誠

① 活動するうえで直面した困難や葛藤

事前インタビューの際、そもそも外に出ようと思わないという方が多かったので、そういう方にどうすれば参加したいと思ってくれるかを考えるのが難しかった。結局当日はその方はいらっしゃらなかったが、そういう方に参加いただけるような企画を考えられるように努めた。結果、チームで検討した企画案が実施された。

② 活動したことによるまわりの変化や連携先に対する影響

西田さんは、いつもはぜんぜん歩かないのに、動物園ではたくさん歩けたと話してくれた。疲れさせてしまったなという反省はあるが、嬉しかった。

③ 「社会共生実習」を受講したことで起きた自身の変化や感じた成長

- ・自分から話すことが苦手だったが、受講生全員が話さなくてはいけない機会が多々あり、そのおかげで話せるようになったと思う。まだ物怖じはするものの、グループ内での役割分担があったので、自分に割り振られた役割への責任を果たすために行動し、その結果、成長できたように思う。
- ・いろいろな人と連携してやっていくのが初めてだったので、とても新鮮だったし、成長できたなという感じがある。
- ・高齢者の方は耳が遠い方が多いので、上手くつたわるように大きな声で話したりゆっくり話したりする癖がついた。意識するようになった。
- ・最後の送迎時には、「楽しかったよ」と言ってくれたことが嬉しかった。
- ・良い経験になった。

障がいがある子どもたちの放課後支援

担当教員：土田美世子

(1) 取り組みの趣旨・目的

本プロジェクトは「障がいがある子どもたちの未来に向けた共生社会の実現」をテーマとする。プログラムでは、放課後等デイサービス「ゆにこ」での実習を通じて、障がいがある子どもたちとの関わり方を学び、子どもたちの未来につながる支援について考える。

一人ひとりの子どもとの関わりを通じて得た理解と共感をもとに、「共生社会の実現のために何が求められるのか」について考察を深め、受講生が共に学びあうことを、プログラムの最終目標とする。

(2) 2024年度取り組みの紹介

本プロジェクトは、放課後等デイサービス「ゆにこ」で行う週1回の実習を活動の核とする、半期(前期)のプログラムである。2024年度は、「ゆにこ神領」、「ゆにこ神領重心」、「ゆにこ青地」、「ゆにこ瀬田」の4事業所で学外実習を依頼することができた。4つの事業所は、それぞれ利用する児童の個性が異なるため、受講生の希望を第一義とし、実習先とも協議のうえ、それぞれの実習先の振り分けをおこなった。

プログラムは、①「ゆにこ」での実習に関連した学内での学習、②基本的に週1回の「ゆにこ」での学外実習、③まとめとしての共生社会実現に向けた考察、の3つのパートから成る。基本的には①から③に向けて時系列で学びを進めていくが、実際には①～③を行きつ戻りつしながら学びを深めていく。各パートについて、簡潔に紹介する。

①学内では、まず現場での実習に向けた準備を実施した。学外実習開始後は、各自の子どもたちとの関わり場面を日誌に記述することで振り返り、実習での反省・考察を授業内で受講生が共有し、一人ひとりの子どもの個性、「ゆにこ」の役割について理解を深めていく。プログラム後半では、通所児童の保護者からの講話を受け、利用児童に対する家族の思い、家族にとっての「ゆにこ」の役割について、学ぶ機会をもった。また、学外実習の終盤には、「個別支援計画」の作成について管理責任者である増田氏から講義を受け、支援者としての子どもとの関りについて考える機会を得た。



②プログラムの中核となる学外実習に入る前に、オリエンテーションとして、管理責任者である増田氏より、ゆにこ現地で講話を受け、実習に向けた心構えについて指導を得た。



5月連休明けから開始した「ゆにこ」の実習では、その日の利用児童の受け止めのための職員ミーティングから、受け入れ準備又は送迎の同行、活動への参加、後片付け又は家庭までの送迎への同行・終了時のミーティングまでの、半日～1日の実習を実施する。活動の中で学んだことや疑問に感じたことは、主に終了時のミーティングの場で発題し、職員からフィードバックを得た。また、実習後に作成した日誌に「指導を受けたこと」「学んだこと」をまとめ、指導担当者からコメントを得ることで学びを深めた。

最終盤では、増田氏からの講義を基にひとりの子どもの支援について「個別支援計画」を作成し、支援対象児童にとっての「ゆにこ」の役割、支援について考察を深めた。



二〇二〇年度「ゆにこ」実習観察 報告書		観察者	実施日時
観察場所			
観察対象			
観察目的			
観察内容			
観察結果			
考察			
感想			

※観察者：増田氏、ゆにこ実習指導員、ゆにこ実習生

③学外実習終了後は、実習報告書の作成等のまとめ作業を通じて、共生社会の実現に向けて各自考察を深めるとともに、授業内での報告を通じて学びや考察を共有した。

学びのアウトプットをもとに深草学舎での夏期のオープンキャンパスに向けた報告資料を作成し、共生社会形成に向けてのアクションの第一歩として、高校生・保護者に向けてオープンキャンパスでの報告を実施した。

(3) 2024年度の取り組みの成果と課題

半期のプログラムであるため、学外実習での学びと学内での学びとを効果的に結びつけることは必須となる。学外実習先との連携は総体としては良好であるが、受講生個人のニーズや経験・力量に応じた指導の実現には、各事業体とのより緊密なコミュニケーションが求められる。特に、実習への取り組みに課題をかかえる受講生の指導に際しては、学内での受講生への個別指導の充実等、ていねいな関りに基づいた連携が必要であった。

利用児童の「個別支援計画」の作成は、支援者の立場にたち、ひとりの子どもの未来に向けての支援を考察する良い機会となった。一方では、8回程度の実習から、子どもたちのストレングスを活かす計画作成は、困難に感じた受講生も多かった。今年度は計画作成前の指導を実習先に全て任せる形となったが、大学での個別指導を実施するためには、実習先との更なる協議が必要であったと考える。

昨年度から実施されている共生実習全体の受講生との「学びの共有」の授業機会の設定は、受講生にとっては、自分の参加するプログラムの相対化に役立った。プログラムの最終的な目標である「共生社会形成に向けて各自が何をしていくべきか」についての考察が、子どもに対する支援だけでなく、障がいのある人が生きやすい社会形成までを意識したものになったのは、この相対化の成果であると考えている。

(4) 受講生の感想

現代福祉学科：上野帆乃夏

① 活動するうえで直面した困難や葛藤

実習先の「ゆにこ神領・重心」は、最重度の障がいのある子ども、医療的ケア児を対象にしていた。言葉でのコミュニケーションは困難で、非言語コミュニケーション(目の動き/視線/瞳孔の大きさ/手足の動きなど)で、表現・意思表示をしてくれる子どもがどのような時にどういう反応をするのか、また、どんなことが好きなのかなど、意思疎通を図ることが大変だった。

② 活動の実際から学んだこと

実習で出会ったEちゃんの初対面での印象は、「おしとやかで大人しそう」というものだった。Eちゃんからの反応があまりなかったためかもしれない。でも、2回目の実習からは、笑顔の場面が見られた。

4回目からは、Eちゃんを個別支援計画作成の対象に選ばせていただき、Eちゃんとの関わりを中心とした実習がスタートした。おやつ介助を通じておしゃべりしたり、一緒に雑誌見たりして遊ぶなど、関りを深めていった。次第にEちゃんは表情だけではなく、声でも気持ちを表現してくれるようになった。

最初の印象とは違い、実際に関わるなかで、Eちゃんは表情が豊かで優しく元気な子であることに、気づくことができた。

③「社会共生実習」を受講したことで起きた自身の変化や感じた成長

自閉症スペクトラム障がいをもつ方の幼少期の自伝を読む機会があり、周囲の方の誤った認識や理解不足による当事者の「生きづらさ」に衝撃を受け、完全に共感することは難しくても理解しようとする、理解者のひとりになることはできるのではないか、という思いでプログラムに参加した。

はじめは、障がいのある子どもたちと関わり理解したい、という気持ちだったが、今では障がいが「ある/ない」に関係なく、困っている人がいたら積極的に声をかけられるようになりたいと考えるようになった。社会には様々な考えや意見があると思うが、自分の経験を通じて「障がいのある子どもに実際に接していくうちに、気付けば偏見がなくなっていたよ」と、自分の実感を通じて周りの人に話すことで、障がいのある人への理解を広げられたらと願っている。

(5) 2024 年度活動報告会の発表ポスター



2024年度社会共生実習報告会

障がいがある子どもたちの放課後支援

実習の紹介

小学生から高校生の障害をもつ子どもの生活支援を実施する「放課後等デイサービスゆにこ」での実習を通して、支援のあり方や子どもとの関わり方を学び、障がいをもつ子どもやその保護者にとっての共生社会の在り方について考えるプロジェクトです。



ゆにこでの実習

平日の実習について

- 送迎** それぞれの学校へ車で送迎を行います。
- はじまりの会** 手洗いうがい、連絡帳の提出などを行います。その後一日の流れをみんなで確認します。
- おやつ時間** 自分の好きなおやつを2種類選び、みんなで食べます。



- あそび** それぞれがやりたい遊びをします。おやつを食べないで早めに遊ぶ子どもいます。
- 帰りの会** 点呼をして、配りものを確認したら帰りに乗る車の発表を行います。
- 送迎** 各自のお家まで送り、親御さんへその日の活動の報告をします。



ゆにこ神領

- 小学1年生～高校3年生までの障がいのある子供たちが、集団だからこそ得られる経験をしてみよう場所
- 地域とつながり、共に成長していく
- 障害のある人もない人も、共に生きる社会を目指す



重心（重症心身障害児）について

- 定義**
- 重度の肢体不自由と重度の知的障害とが重複した状態にある子ども。
- 特徴**
- 自力での移動が困難。（バギーに乗っている子が多い）
 - 言葉による理解や意思伝達が困難。
 - 手足に变形、拘縮が生じている。
 - 看護師から医師的ケアを受ける子が多い。
 - こちらからの主体的な関わり・気かけが大切。



神領との違い

- おやつ時間
 - 利用者の表情などからおやつを決める。
 - 大きい物や硬い物は食べやすいように細かくする。
 - 食べることが出来ない子もいる。
- あそび
 - 紙本やお絵描きなど移動を伴わないあそびが多い。



関わりの中で意識したこと

- 表情や目、体の動きなどを気にかける
ex)目がハッと開く、手足をバタバタさせる
- 積極的に話しかける(話題は身近なもの・利用者さんなど)
職員の方がかけてくださった言葉...
- 決めつけすぎない、可能性を狭めない
- 楽しむ気持ちで関わる



ゆにこ青地



- 主に発達障害を持つ子どもも多く、小学1年生～中学3年生までの障害の種類から障害度まで幅広く受け入れていることが特徴。
- 遊びの時間に、公園へ出かけたりドライブをしたりなど外へ行くこともある。
- スタッフに看護師がいるため、医師的ケアが必要な子どもも受け入れられる。

YYZさんとの関わり

- YYZさんの特徴⇒発語がない
- 先生と一緒に行動する。⇒椅子に座って近くの子が遊んでいるおもちゃを触るなど興味を示す他、公園でシャボン玉あそび



実践

- YYZが一人である際、積極的に話しかける。遊びの時間に、こちらからジェスチャーで話しかける。

反応

- 自分の存在をジェスチャーでアピール
- ⇒私が反応すると笑顔を見せた。

結果

YYZさんと言葉以外でコミュニケーションを取り、仲を深めることができた。



ゆにこ瀬田

- 主に小学校高学年～高校3年生の障がいがある児童に対して、放課後や休日(土曜日)、長期休みに子ども達を支援して、自立をサポートする放課後等デイサービス施設。
- 家庭環境が複雑な子ども達が多いので、**家族に関する話し合い**。他のゆにこの施設と比べて障がいの子どもの数が多いことや、高学年の子が多いことも特徴。障がいの程度、種類関係なく一緒に過ごしている。
- 2階建てで、1階が職員室。2階がプレイルーム。



実習で行った支援

- 手紙などへの送り迎え
- フリータイムでの遊び
- ex)ポケモンカード、日本地図パズル、ボードゲーム

- 土曜日には...
 - お昼ご飯やおやつ作り
 - CDレンタル
 - 工作
 - 株式会社イベント見学



立のためのゆにこ瀬田での活動

- ニコニコ
値段が決まられたおやつを100円以内になるよう自分で計算しながら選んで食べる体験。
- クル活動
的めに子ども達が話し合っ、みんなで取り組む活動を考える取り組み。
- 移住支援
高校3年生がゆにこを卒業後社会に出るために、障がい者の就労支援を行って社会へとつなげる支援。



Eちゃんとの関わり

初対面:おしとやか、大人しそう

2回目～笑顔の場面を見る

4回目～Eちゃんを中心とした関わりスタート
おやつ介助やおしゃべり、一緒に雑誌見たりして遊んだ
表情だけでなく声でも表現してくれるように
!実際に関わると...
表情が豊かで優しく元気な子



実習を通して

実習中、接し方が分からず不安になることがありましたが、利用者の笑顔に何度も救われました。

アプローチの仕方は人それぞれで表情やジェスチャー、スキンシップなど、言語では表現できないコミュニケーションを学びました。

利用者の成長に寄与し、見届けるやりがいのあるお仕事でした。

実習で学んだこと



・福祉という観点で物事を考えながら、子どもたちと関わり様々なコミュニケーションの取り方を実践を通して学んだ。

・支援に完全な正解はなく、支援員の方も日々手探りで子どもたちの支援を考えているということ。

・障がいを持った子どもと関わったことで、障がいはハンデではなく個性であると学んだ。

以前は障がいと聞くと、大変そうな印象を持っていたが、個性豊かな子どもたちが、ゆにこの活動を通じて様々な物事を考え、成長していることを学んだ。

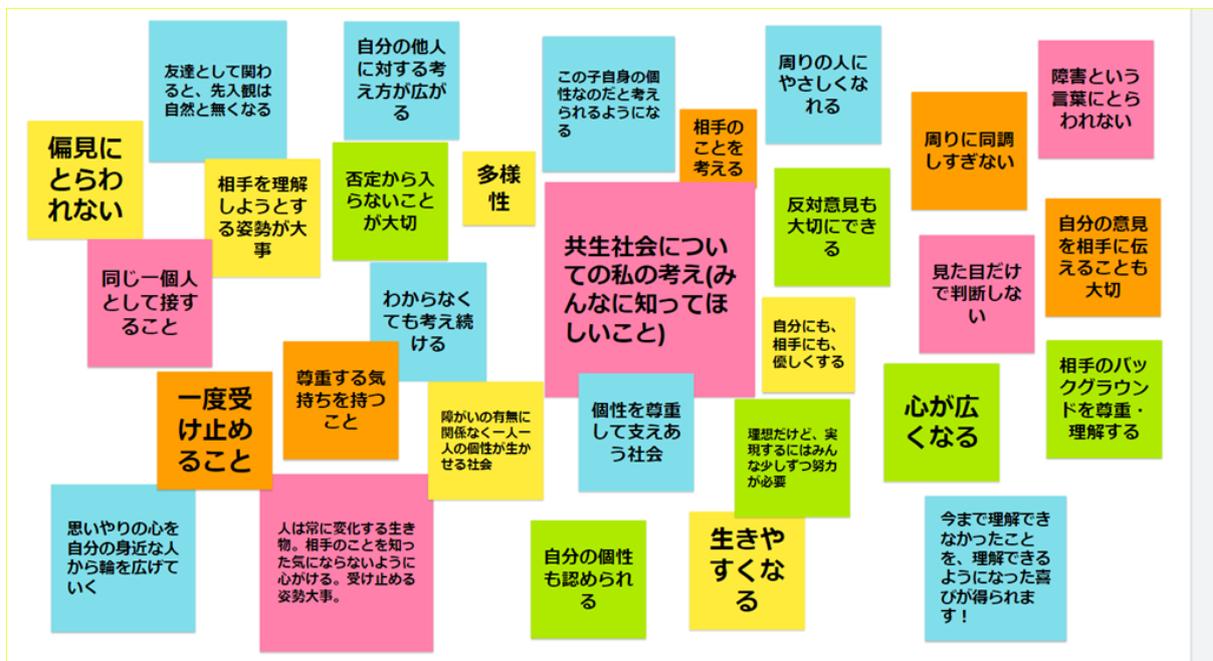
ゆにこの活動で学んだこと

- ・コミュニケーション
- ・→子供たちは各々得意不得意があり、一人ひとりに合うやり方でコミュニケーションをとることが大切。例えば、言葉だけでなく、ジェスチャー等のその子に合わせたコミュニケーション。
- ・実際に・・・YYZさんだけのジェスチャーを使って会話をした。
[人差し指を両頬にあてる⇒ゆにこ]



最後に

「共生社会」について考えました



ゆにこ 神領 吉川由紀音 野川真央 橋本怜亜 森田千晴

ゆにこ 神領 重心 上野帆乃夏 三村健人

ゆにこ 青地 関本楓花 今元茉那

ゆにこ 瀬田 浮田優希 前川高寛 藤本みか 梅垣 凜

自治体を PR してみる！

担当教員：岸本文利

(1) 取り組みの趣旨・目的

映像で自治体や地域を PR する事を目的とする。映像制作の編集撮影スキルを身に付けるだけでなく、取材対象者との交渉などを通じて PR の本質などを学ぶ。

(2) 2024 年度の取り組みの紹介

門真市を PR するプロジェクトには、新規受講生 15 人が参加した。プロのカメラマンや編集マンから基本スキルを教わった後、門真市役所をメンバー全員で訪れ、宮本一孝市長から門真市の現状などについて説明を受けた。その後、門真市広報課の案内で門真市内を見学した。ふたりで 1 チームとなり、夏休み前までに門真市を何度か訪れて動画コンテンツの企画案を考え、学生たちで撮影交渉などをおこなった。2024 年度のテーマは「門真市にある食パン専門店の紹介」「門真市にある変わった自動販売機」「門真市に本社がある世界的に有名なフィギュア製作会社の舞台裏」「ゾンビセンターの舞台裏」「門真酒を中国人留学生が紹介」「門真市にある中華料理を中国人留学生が紹介」「門真市の変ったタコ焼き屋」の 7 本で、10 月から編集を開始したが、追加撮影や構成の変更などで全チームの編集が終わったのは 12 月末で、さらに門真市からの修正要請などで完成したのは 25 年 1 月末だった。



また滋賀県高島市畑地区の棚田を PR するプロジェクトには新規受講生 3 人、継続受講生 3 人が参加した。継続受講生が新規受講生を指導しながら企画制作を進めた。ドローンを使った畑地区の空撮をおこなったほか、スタビライザーを使った撮影にも挑戦した。田植えや夏場の草刈りなどの他、学生らが地元の人たちの協力を得て無人の自販機を作って企画コンテンツにした。また、動画コンテンツを学生が作った「HATA 暮らし放送局」というタイトルのプラットフォームにアップし、12 本のショート動画と 2 本の長尺動画を現在視聴することができる。



(3) 2024年度の取り組みの成果と課題

門真市をPRするプロジェクトではコンテンツを7本制作し、2025年4月以降順次門真市の公式YouTubeチャンネルで公開される。また滋賀県高島市畑地区の棚田PRプロジェクトでは「HATA暮らし放送局」のプラットフォームを作成し、ショートコンテンツ12本、YouTube用コンテンツ2本をアップしている。学生らが作った無料自動販売機は、ABCテレビの7月放送の「相席食堂」で取り上げられた。課題としては中国人留学生の語学力が極めて低く、意思疎通がかなり厳しかった。このため、指示した作業ができなかったり、期限などが守られなかったり、かなり困った。「理解できない」と言ってくれば、こちら方法を考えるのだが、「わかった」と言われるとこちらその言葉を信じるしかなく、結果的に理解できていない事が後でわかる事になる。中国人留学生同士でチームを組ませたことが、余計に問題を大きくしたかもしれないが、日本人学生と組ませた場合にも同じ現象がおきてチームが崩壊する恐れもあり、悩ましい課題であると感じる。

(4) 受講生の感想

<棚田プロジェクト>

コミュニティマネジメント学科：十塚奈津

① 活動するうえで直面した困難や葛藤

棚田はどうしても企画内容が似たり寄ったりなりがちだったため、いかに企画内容や編集で工夫するかを考えることに苦戦した。また、下級生の編集などにアドバイスをする時に、編集者である本人のこだわりとアドバイスをうまくすり合わせて動画制作を進めていくことが個人的に困難だった。

② 活動したことによるまわりの変化や連携先に対する影響

棚田プロジェクトに参加することで、棚田に興味を持ってくれる人が周りに増えた。YouTubeチャンネルはもちろんだが、自分たちが作った自販機がメディアに取り上げられたことで、高島の棚田を少しでも多くの人に知ってもらうきっかけが作れたのではないかと思った。

③ 「社会共生実習」を受講したことで起きた自身の変化や感じた成長

学生ではできない貴重な経験ができた。実際に大学外に出て、企業様や大人を相手にアポイントメントをとったり、お話ししたりすることはなかなか学生のうちにできないことだと思う。また、学科や学年、国籍が違ういろんな人と共に作業を進めていくなかで相手の話を一旦受け入れることの大切さや、時間をいかに効率よく使うかの大切さを学んだ。

① 活動するうえで直面した困難や葛藤

PR動画を作成するなかで、撮影も編集も自分にとって初めての経験であったためさまざまな場面で困難や葛藤に直面しました。特に、撮影の面ではペアの子とシーンのつながりを考え、つなげた時に感じる違和感を少なくするために何度も撮り直しをおこないました。カメラをまわす秒数やどのような角度から撮るかを考える際にも、たくさんの困難に直面しました。

編集面では、「視聴者が動画を最後まで見てくれるようにするため」という意識を常に頭に置いていました。だからこそ、おもしろく見せるための動画構成を考える時間が一番、困難と葛藤に直面しました。

② 活動したことによるまわりの変化や連携先に対する影響

インタビューを依頼した方や門真市役所の方と連絡のやりとりを重ねたことで、初めて社会で働く方と一緒にプロジェクトを完成させる経験をしました。電話やメッセージを相手の方に送る際には失礼のないように言葉遣いだったり文面だったりたくさん考えました。

社会で働く方と直接的にコミュニケーションをとることができ、社会の常識と自分から行動することの大切さを学ぶことができました。

③ 「社会共生実習」を受講したことで起きた自身の変化や感じた成長

普段、多くの授業で受けている座学とは違い、実習は自ら動いて考えて作成するという過程がありました。自分の考えをしっかりとアウトプットしなければ、プロジェクトは進まず、停滞してしまうことを感じ自分の意見を主張し、相手の意見を聞きながら前に進むことの繰り返しでした。また、ひとつの視点だけでなく他の視点から動画を見た方がよいものになると考え、複数の視点からのアイデアを発案することができました。社会共生実習を通して、自分の力でひとつの作品を完成させる目標を持ったことで自分の行動力をより積極的にすることができました。

(5) 2024 年度活動報告会の発表ポスター



発信情報

WEB

龍谷大学社会学部「社会共生実習」公式ウェブページ

URL : <http://www.soc.ryukoku.ac.jp/department/info/training/>

メディア

①2024（令和6）年9月25日／朝日新聞 Think キャンパス

お寺の役割を知り、可能性を引き出そう——龍谷大学社会学部の「社会共生実習」に見る課題発見・課題探究型の学び



Sponsored by 龍谷大学



2024/09/25

社会・マスコミ系 京都市 大聖院 滋賀県 龍谷大学

2025年4月、龍谷大学社会学部は瀬田キャンパス（滋賀県大津市）から深草キャンパス（京都市伏見区）に移転、現在の3学科制を改組し、総合社会学部を開設する。新生・社会学部の学びを象徴するのが、現在3学科が共同運営する地域連携型実習「社会共生実習」だ。その一つ、「お寺の可能性を引き出そう！—社会におけるお寺の役割を考える—」の活動内容について、担当教員の猪瀬徳理教授と古荘匡義准教授、学生たちに聞いた。（写真は浄土宗本山本願寺で国宝部門の説明を受ける学生たち。龍谷大学提供）

◆お寺の役割とは？ お寺の可能性とは？ お寺の社会活動に参加し、考える。

社会学部の「社会共生実習」は、現代社会が抱える課題に取り組む複数のプロジェクトの中から学生が興味あるものを選び、地域の現場で課題を体験、連携先と協働して課題解決や課題探究に向けて活動するというもの。最長3年間実習を継続できる。猪瀬教授と古荘准教授のプロジェクトの実習現場は、京都・滋賀などのお寺である。お寺が地域社会で行っている活動に参加したり、僧侶の話を聞いたりしながら、社会におけるお寺の役割を学び、可能性を引き出すことをめざしている。

お寺という、現代の若者には少し縁遠く感じるかもしれない。それは京都・西本願寺の学寮をルーツとし、「仏教SDGs」を推進している龍谷大学の学生も「同じです」と、猪瀬教授は微笑む。当初はお寺より子どもや地域活性化の活動に惹かれて実習に参加する学生が多いが、実習を進めていくうちにお寺に抱くイメージは変化していくという。

「全国に7〜8万ヶ寺、コンビニよりもたくさんあると言われるお寺は、信仰に限らず社会活動の拠点となる可能性を秘めています。少子高齢化や都市部集中の人口移動が進むなか、お寺は檀家との関係だけでは維持が難しくなると考えられており、子ども食堂や高齢者向けのサロンなど、地域の居場所づくりや、地域住民とのつながりを深めたり、広げたりする活動を積極的に行うお寺も出てきています。お寺や仏教とは無縁だった人や組織に、活動の場を提供するといったことも増えていますね」

古荘匡義准教授は、こう言う。

「学生たちは、人々につながるお寺の活動に実際に参加していきます。龍谷大学社会学部のモットーは現場主義。本学は必修科目で仏教について学びますが、さらにお寺がどんな場所かを体験的に知ってもらうことが目的の一つとなっています」



写真左：猪瀬徳理（いのせ・ゆり）／龍谷大学社会学部社会学科教授、博士（行動科学）、1974年北海道出身。北海道大学大学院博士後期課程修了。北海道大学大学院文学研究科助教、龍谷大学社会学部講師、准教授などを経て、2021年より現職。専門は宗教社会学。信仰継承の要因とプロセス、宗教とジェンダーや地域社会との関わりについて研究する

写真右：古荘匡義（ふるそう・ただよし）／龍谷大学社会学部コミュニティマネジメント学科准教授、博士（文学）、1980年大阪府出身。京大文学部卒業。京大文学部に修士入学し、卒業。京都大学大学院文学研究科思想文化学専攻宗教学専修博士課程修了。大谷大学文学部准定期助教、龍谷大学社会学部講師などを経て、2022年より現職。専門は現代フランスの宗教学、日本宗教思想、宗教学

実習は「知る」から「考える」、「企画・実践」へと進んでいく。前期の実習は、お寺の可能性を体験的・主体的に知るためのフィールドワークや講演から始まる。後半は学生自身が企画し、訪ねたい場所や話を聞きたい人を探し、実習先との交渉も行う。例えば2023年度は、10代の居場所としてお寺を活用するNPO法人「やんちゃ寺」の代表を講師に招いたり、京都市の浄土宗総本山知恩院が開催する子育て支援活動「サナラ親子教室」を見学したりした。後期の実習では前期での学びを生かし、お寺の可能性を引き出す活動を企画・実施する。イベントや社会調査、ワークショップなど、活動内容は自由。実習の事前・事後学習を徹底して行い、関連資料で知識や考えを深めることも欠かさない。

「2022年度には、ある学生が、地域に根ざした活動をされている滋賀県草津市の西方寺さんを見つけてきました。その年の秋に行われた『西方寺祭』でスタッフとして参加しながら、学生が考えた境内スタンプラリーを実施。それ以来、西方寺さんは私たちのフィールドワーク先になり、今も連携が続いています」と猪瀬教授は言う。2023年度の後期は三つのグループに分かれ、その一つが西方寺の「1111年祭」に参加。来場者に仏教を身近に感じてもらったため、「お祝儀さまにかなえてほしい願い」をメッセージボードに書いてもらった。



写真左上：一念寺（京都市下京区）を拠点に行った「ご縁で繋がるフォトラリー」のパンフレット（左側）
 左下：寛永寺の一念寺では動物福祉団体「Pawer」による読書会「いぬとわこ」も開催されている。右上：西方寺（滋賀県彦根市）の「1111年祭」で実施したメッセージボード。右下：祝明寺（滋賀県守山市）が開催する「みんなの英語教室」に参加（写真提供：龍谷大学）

「ある学生が若年層へのアプローチとして、京都市の一念寺さんで行う事前学制的オープンキャンパスを企画したのですが、予約が入らず中止になってしまいました。その学生は次年度も実習を受講し、龍谷大学大宮キャンパスで専休みに開催されたオープンキャンパスに合わせて「ご縁で繋がるフォトラリー」を実施しました。一念寺さんを拠点にして、キャンパス周辺の本願寺や仏教ゆかりの建築物の写真を取りながら回るものです。さらに、その学生はそれまでの活動が自分の興味関心に基づいていたと反省し、その年の後期に複数のお寺で「大学生に定むこと」をテーマに関き取り調査を行いました。これなどは、プロジェクトが継続してステップアップしていった好例だと思います」と古荘准教授は言う。

他のあるグループは、京都市の明覚寺で「お寺でおうちカフェ」を企画した。実施には至らなかったが、「活動を通じて企画力や協働力、前に進める力などを養いました。やってみることが、何より大切なことです。慣れない電話でのコミュニケーション、協働の難しさ、リーダーシップを取るプレッシャー。壁を乗り越えれば、社会で役立つ力がついていると思います」と期瀬教授は言う。

一方、連携先のお寺にとっても学生と関わるのが良い機会となっている。学生がお寺に集まる子どもたちや保護者と交流したり、地域とお寺をつなぐことによって、お寺を中心に人の輪が広がっている。

「多くの学生にとって、お寺は風景の一部だけではありませんでした。しかしこのプロジェクトを通じて、お寺が人と人のつながりを深く増やそうとするのだと、意識が変わっていくようです」と古荘准教授は言う。

◆実習で知った可能性、お寺で地域の居場所をつくりたい ～横江寧音さん（滋賀県出身、社会学部社会学科2年）



「龍谷大学の社会学部は自由な雰囲気があり、やりたいことができます」と言う横江寧音さん

大学進学を考え始めたころは、大学で勉強したいことがはっきりしていませんでした。そこでいろいろなことを幅広く学べる社会学部を検討したのですが、龍谷大学のオープンキャンパスで聞いた「現場主義」「理論と実践の往還」という言葉が胸に響き、「ここしかない！」と決めました。その言葉をまさに体現するのが、「社会共生実習」です。

お寺の中には、活動の場として広く使ってほしいところもあれば、そうではないところもあり、その違いを現場で知るのも興味深い点でした。私はお寺との連絡役を引き受けたのですが、これが思ったより難しく、実習スケジュールに合わせて進めるのに苦労しました。今まで関わったことのない方々と話し、話をすることも少しずつ慣れ、ようやく自信を持ち始めたところです。

今年、滋賀県の門見寺さんが子ども向けにお寺を開放していることを知り、話を伺ってきました。私はもともと「地域の居場所づくり」に興味があり、お寺がその場になることを知ったので、将来もこのような活動に関わりたいと考えようになりました。活動を通して仏教的な考え方を身につけ、広い視野を持つ人間になりたいと思っています。

龍谷大学の社会学部は、実習以外でも自分がやりたいことをさまざまなバックアップしてくれます。私は昨年、社会学部独自の学生団体で地域の多様な人が交流できるクリスマス会を開催しました。課外も含めたサポート体制も、この大学の魅力だと思います。

◆フィールドワークが将来につながる貴重な経験に～山崎翔さん（京都府出身、社会学部社会学科2年）



「テーマの広い社会学部では、興味・関心に合うことがきつと見つかります」と山崎さん

私は中学校の社会科教員になることを目標としています。そのため教員免許を取得できる大学・学部を探るなかで、龍谷大学の社会学部が法学だけでなくフィールドワークを重視していること、学生が主体的に学べることを知り、志望を決めました。

地域での学びはとても新鮮で、現場に行くことで新たな視点や、いろいろな方向性を見出すことが可能です。藩が書いているものが必ずしも正解ではなく、実際に体験することでそれとは違うことが見えてきます。

しかし、自分たちでフィールドワーク先を開拓するとなつたときに、壁にぶつかりました。お寺さんはインターネットで情報が公開されていないことも多く、活動先を新たに見つけるのは簡単ではありません。お寺さんの活動情報は、町内の掲示版などで行うことが多いのですが、SNSなどをもっと活用すれば、より多くの人が知るきっかけになるのではないかと思います。これも自分が行動してみてもいいなと思います。

中学校の社会の教師にもいろいろなことを教えてもらいました。学力も、興味関心もばらばらな生徒が集まる中学校は、人生の分岐点にあります。そこで生徒にいい影響を与えられる教師、フィールドワークなどを通して教科書以外のことも教えらるる教師になりたいと考えています。そのためにも、今は貴重な経験ができていいと思います。

◆生まれ変わる社会学部——進化する現場主義、理論と実践の往還で、よりよい未来を創る人を育てる



社会共生実習の授業の一場面

古荘准教授は「自分たちで地域とつながりながら自主的に学べるのが、『社会共生実習』の特徴です。現場で体験して学ぶことは、きっと将来に生きてきます」と話す。

この「社会共生実習」のコンセプトは、毎年度改訂予定の総合社会学科に継承される。総合社会学科では、1～2年次に、新たに設置される「現代社会」「文化・メディア」「健康・スポーツ社会」「現代福祉」の4領域から一つを選び、研究したいテーマを設定。3年次からは領域の枠を超え、「プロジェクト科目群」から自分のテーマに合うプロジェクトを選択し、テーマを絞り下げる。そのプロセスで「理論と実践の往還」サイクルをつくり、広い視野で社会の問題を発見し、他者との協働によって解決へ邁進力を養成していく。

今回紹介した「お寺の可能性を引き出す！—社会におけるお寺の役割を考える—」のプロジェクトも、新しいカリキュラムに引き継がれる予定だ。仏教とSDGsは通じるところが多く、龍谷大学では「仏教SDGs」を掲げている。お寺の可能性を知り、引き出す実習は、サステナビリティへの気づきの機会にもなっている。

(朝日新聞社に無断で転載することを禁じる 25-1498)

龍谷大学 社会学部

2024 年度 社会共生実習 活動報告書

2025 年 3 月 発行

発行元 龍谷大学 社会学部

住所：〒612-8577 京都府京都市伏見区深草塚本町 67

TEL：075-585-7672 FAX：075-585-6377

E-mail：shakai@ad.ryukoku.ac.jp

URL：http://www.soc.ryukoku.ac.jp/department/info/training/



公式 Web サイト



公式 X



公式 Instagram



公式 Facebook

龍谷大学社会学部社会共生実習の
公式 Web サイト・公式 SNS では
最新の情報を随時更新しています！